

野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

高知県香美郡野市町

深 淵 北 遺 跡

—— 野市町西部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 ——

1996. 3

高知県香美郡野市町教育委員会

高知県香美郡野市町

深 淵 北 遺 跡

—— 野市町西部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 ——

1996. 3

高知県香美郡野市町教育委員会

卷頭図版 1

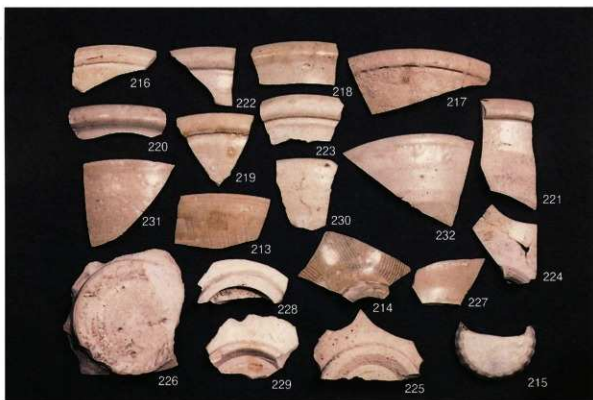


綠釉陶器 (外面)



同上 (内面)

卷頭図版 2



白磁・青磁 (外面)



同上 (内面)

序

この度、平成6年度に実施しました深湖北遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。

野市町は近年、人口が増加し、それに伴う開発も増加する傾向にあります。この様な一方で本町の主要産業である農業の近代化も進めています。深湖地区（父養寺地区）においても圃場整備事業の進展が図られておりましたところ、平安時代から中世にかけての遺跡である深湖北遺跡が発見されました。

野市町では、貴重な文化財を保護・保存し後世に伝える方途を検討いたしました。発掘調査によって、記録保存を行い、その成果を広く公表し、郷土の歴史解明に資することになりました。

今回の発掘調査では、平安時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されました。中でも官衙関連の遺物が多く発見され、古代、古物部川水系を背景に栄えた当地域の人々と都との繋がりを明らかにするだけでなく、県内の歴史の発展過程を解明する上で貴重な資料になりました。

今回の報告が、埋蔵文化財への一層の理解を深めていただく一助となり、考古学研究的資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご尽力いただいた（財）高知県埋蔵文化財センター及び高知県教育委員会、調査に携わった方々にお礼申し上げますとともに、父養寺地区の方々、南国耕地事務所の文化財への深いご理解とご協力に感謝申し上げます。

平成8年3月

野市町教育委員会

教育長 橋 田 速 生

例 言

1. 本書は、野市町教育委員会が平成6年度に実施した野市町西部地区県営園場整備事業に伴う深湖北遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 深湖北遺跡は、高知県香美郡野市町父養寺に所在する。

3. 発掘調査は一次調査（確認調査）を平成6年5月17日から5月24日まで行い、二次調査を同年9月13日から12月6日まで実施した。

4. 調査面積

(1) 調査対象面積 50,000㎡

(2) 調査面積

一次調査 500㎡

二次調査 2,710㎡（試掘調査910㎡ 本調査1,800㎡）

5. 調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査員

出原 恵三 助高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3係長

佐竹 寛 同 主任調査員

吉成 承三 同 調査員

(2) 事務担当

小松 大洋 野市町教育委員会社会教育主事

6. 本書の編集は野市町教育委員会が行い、編集実務は佐竹寛、吉成承三の両名が行い、執筆については第I章、第II章を佐竹、第V章を吉成、第III章、第IV章は佐竹、吉成がそれぞれ担当し、本文末尾に執筆者名を記した。

7. 出土遺物の色調については、「新版 標準土色帖」の名称を使用した。

8. 本報告書を作成するにあたって下記の諸氏から助言・教示をいただいた。

橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）

浅野春樹（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、荻野繁春（福井工業高等専門学校）

吉村正親（京都市埋蔵文化財研究所）、中野良一（愛媛県埋蔵文化財調査センター）

片桐孝浩（香川県埋蔵文化財調査センター）、辻 佳伸（徳島県埋蔵文化財センター）

松田直則（高知県埋蔵文化財センター）

9. 発掘作業及び、整理作業で下記の方々のご協力を得た。

発掘作業 貞岡重道、佐野宣重、佐々木龍夫、小松一仁、大黒貞之、町田恵子、森田彩子

杉本加代、間城美恵子、岡村佐由紀、石川康人、小松和則、山本隆則

整理作業 尾崎富貴

また、整理作業にあたっては、大原喜子、山中美代子、浜田雅代、東村知子、松山真澄、岩本須美子、小野山美香、大黒泰子、岡村真由紀、河村真美の協力を得た。

目 次

1. 本文目次

第I章 調査に至る経過	1
第II章 周辺の地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4
第III章 調査の概要	6
1. 調査の方法	6
2. 1次調査の概要	9
3. 2次調査の概要	11
第IV章 遺構と遺物	14
1. I区北	14
(1) SK1	14
(2) Pit60	15
2. I区南	18
(1) SD12	18
(2) SD13	19
(3) SB1	22
(4) SB2	22
(5) Pit82	23
(6) Pit88	23
包含層出土遺物	25
(1) I区北	25
(2) I区南	41
第V章 まとめ	49
1. I区北の遺構と遺物	49
2. I区南の遺構と遺物	50
3. 結び - 深河北遺跡の調査成果から見た高知平野の様相 -	51

2. 挿図目次

- Fig. 1 野市町位置図
Fig. 2 野市町地形図
Fig. 3 周辺の遺跡分布図
Fig. 4 調査対象地位置図
Fig. 5 試掘トレンチ及び調査区配置図
Fig. 6 試掘トレンチセクション図
Fig. 7 調査区設定図
Fig. 8 I区北検出遺構全体図
Fig. 9 SK1 平面図・断面図
Fig. 10 SK1 出土遺物
Fig. 11 Pit60 出土遺物
Fig. 12 I区南検出遺構全体図
Fig. 13 I区南SB 1・2, SD12・13 遺構配置図
Fig. 14 SD12・13 遺物出土状況図
Fig. 15 SD12 出土遺物
Fig. 16 SD13 出土遺物
Fig. 17 SB1 遺構図
Fig. 18 Pit135・141 出土遺物
Fig. 19 SB2 遺構図
Fig. 20 Pit82 出土遺物
Fig. 21 Pit88 出土遺物
Fig. 22 G-9 GridⅢ層遺物出土状況図
Fig. 23 G-9 GridⅢ層上面出土遺物
Fig. 24 G-9 GridⅢ層下面出土遺物
Fig. 25 包含層出土遺物 1 (土師器皿・杯)
Fig. 26 包含層出土遺物 2 (土師器杯)
Fig. 27 包含層出土遺物 3 (土師器碗, 黒色土器碗)
Fig. 28 包含層出土遺物 4 (緑釉陶器, 灰釉陶器, 土師器甕)
Fig. 29 包含層出土遺物 5 (土師器羽釜・甕 (移動式))
Fig. 30 包含層出土遺物 6 (土錘, 須恵器杯・蓋・壺・甕・鉢)
Fig. 31 包含層出土遺物 7 (土師器皿・杯・碗)
Fig. 32 包含層出土遺物 8 (瓦器碗・皿, 緑釉陶器皿, 土錘, 土師器甕・鍋, 須恵器杯・甕・鉢)
Fig. 33 包含層出土遺物 9 (須恵器鉢, 青磁, 青白磁, 白磁)
Fig. 34 包含層出土遺物 10 (白磁, 瓦)
Fig. 35 包含層出土遺物 11 (鉄製品, 石器)

3. 表目次

法量表 1	53
法量表 2	54
法量表 3	55
法量表 4	56
法量表 5	57
法量表 6	58
法量表 7	59
瓦法量表	59

4. 写真目次

PL 1 : 調査前全景 (南東から) I 区調査前全景 (西から)	PL11 : 土師器皿・杯
PL 2 : I 区北調査風景 (東から) I 区南調査風景 (北西から)	PL12 : 瓦器碗・土師器皿・杯
PL 3 : I 区北遺構検出状況 (北から) I 区北遺構完掘状況 (北から)	PL13 : 土師器皿・杯・碗
PL 4 : II 区調査風景 (北から) II 区遺物出土状況 (南から)	PL14 : 土師器皿・杯
PL 5 : I 区北遺物出土状況 同上	PL15 : 土師器杯
PL 6 : SK1 遺物出土状況 G-9グリッド遺物出土状況	PL16 : 土師器杯・碗, 黑色土器碗, 灰釉陶器碗, 須恵器杯・壺
PL 7 : G-9グリッド遺物出土状況 同上拡大	PL17 : 土師器杯, 瓦器皿, 土師器壺, 須恵器杯, 壺
PL 8 : P88遺物出土状況 同上拡大	PL18 : 土師器皿・杯
PL 9 : SD12・13 遺物出土状況 (西から) 同上 (東から)	PL19 : 土師器皿・杯
PL10 : SD12・13, P88, SB1完掘状況 (東から)	PL20 : 土師器杯・碗, 黑色土器碗
	PL21 : 土師器壺, 羽釜, 須恵器壺
	PL22 : 土師器壺・釜 須恵器壺

第I章 調査に至る経過

深淵北遺跡の立地する野市町深淵地区は、物部川流域における弥生時代から中・近世にわたる遺物の散布地として高知県教育委員会によって確認されており、昭和62～63年度にかけて野市町小規模排水対策特別事業及び、深淵地区再編農業構造改善事業に先立ち、深淵遺跡の発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代晩期から中・近世にかけての集落跡や瓦窯跡の発見、さらに古代の官衙関連の貴重な遺構や遺物も多く発見され、野市町をはじめ、土佐の古代史を解明するうえでも極めて貴重な発見となった。

今次調査の深淵北遺跡は、深淵遺跡よりもさらに1kmほど北寄りの父養寺地区に位置し、弥生時代から中世にわたる遺物の散布地として確認されていた場所である。平成元年度に県営圃場整備事業に先立ち、試掘調査が行われた結果、10世紀代を中心とする遺物が広範囲にわたって確認された。

今次調査は、野市町西部地区県営圃場整備事業（父養寺地区）に先立ち、実施されたものである。当事業は、農地の区画整理と道水路継続的整備によって、農地の集団化と効率利用を図り、農業生産力の増大と経営の合理化に寄与することを目的とするものであるが、施行されることにより広範囲にわたる遺跡破壊は必至であった。このため、埋蔵文化財保護の立場から高知県教育委員会は南国耕地事務所と協議を重ねた結果、野市町教育委員会に対して、遺跡のより正確な範囲・性格・内容・遺存状態等を把握することと合わせて、記録保存のための本格的な発掘調査の要請を行った。

これを受けて野市町教育委員会は、事業対象地のうち、6・7年度の施行範囲について事前に遺構の範囲及び、遺物の分布密度等を把握することにより、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として試掘調査を実施することとなった。調査は、対象地50,000㎡のうち、約500㎡について県教育委員会と高知県文化財埋蔵文化財センターの協力を得て、5月17日から24日まで実施された。調査の結果、対象地のごく一部の調査であったため、遺跡の全体像を把握するまでには至っていないが、官衙や古代寺院との係りを想定させるような貴重な遺物の出土や、中世の遺物を中心とした包含層が確認されたことから、対象地内には遺構・遺物等が十分に遺存していることが予想された。このため、野市町教育委員会は同センターに専門調査員の派遣を依頼し、調査対象地内の道路・用水路工事予定地を中心にトレンチを設定し、本調査の事前に試掘調査を実施した。その結果、遺構が検出されたトレンチを中心に調査区を拡張し、本調査を実施することとなった。

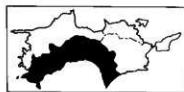


Fig.1 野市町位置図

第二章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

深湖北遺跡の所在する香美郡野市町は、高知県のほぼ中央部にある県下最大の穀倉地帯、高知平野の東端に位置し、県下3大河川の一つ、物部川の下流に発達した扇状地上に集落が発達した町である。この物部川は、県北東部の香美郡物部村、剣山系の白髪山(1,770 m)の東斜面に源を発し、高知平野東部の同郡吉川村で土佐湾に注ぐ。上・中流は仏像構造線に沿って直線的に西南西流しており、流路に沿ったルートは古来、阿波への最短路として知られている。北隣の土佐山田町で流路を南に変えた物部川は、下流に肥沃な香長平野を形成する。高知平野の東部を成す香長平野は不整形の扇状地で、物部川両岸に鏡野・山田野と呼ばれる古期扇状地の砂礫層から成る洪積台地が横たわる。台地面は河床から5m前後の比高をもち、台地の間に新期扇状地が広がり、北端は国分川の侵食により崖をなす。新期扇状地から沖積低地にかけての開発の歴史は古く、県下最大の遺跡群である南国市の田村遺跡群は、縄文時代から近世にわたる巨大な複合遺跡で、水田住居跡も発掘

されている。また、条理制地割の遺構が広く認められているが、旧物部川は洪水氾濫をたびたび繰り返して数流に派流を形成流下しており、条理制地割の乱れた部分も多く、旧水路も数本認められる。中世になると、それまで多数存在していた小流路の幾つかが埋積作用によって埋まり、大きな自然堤防が形成され、物部川の流路の定着化が始まったと考えられている。深湖北遺跡は、物部川の河口から約5kmほど上流に遇った左岸に位置し、調査区近辺の標高は約22m前後である。

沖積台地の開発は、近世になって本格的に進められるようになる。堤防強化や流路の変更工事がなされ、周辺に点在する自然堤防の削平や窪地の埋め立て等を行い、堰・灌漑用水路等を設け導水の後、次第に水田化し、豊かな田園地帯と化す。開発には郷土が発用され、台地上には旧郷土屋敷が散在し、散村的景観を呈する。後免・土佐山田・野市の在郷町もこの時期に形成されたものである。

温暖な気候に恵まれ、かつては南国市と並んで米の二期作地帯として知られていたが、近年は周辺部へも商圏を拡げ、交通の便も生

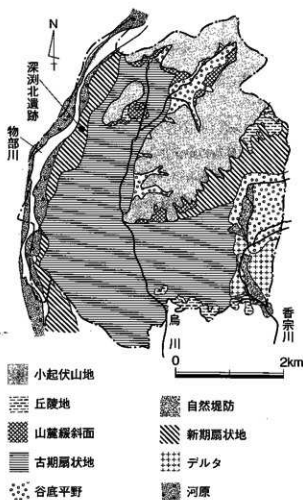
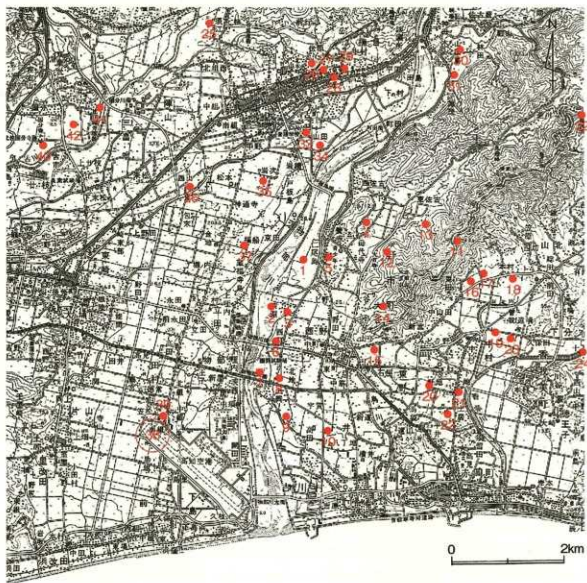


Fig. 2 野市町地形図



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	深淵北遺跡	弥生～中世	15	山下遺跡	平安・中世	29	ひびのき遺跡	弥生・古墳
2	深淵遺跡	縄文～近世	16	西ノ谷遺跡	平安	30	シテナダ遺跡	古墳～平安
3	深淵城跡	中世	17	大崎山遺跡	古墳	31	林田遺跡	弥生～中世
4	鬼山築跡	平安	18	本村遺跡	平安	32	熊河洞沢穴遺跡	弥生
5	母代寺遺跡	平安・中世	19	曾我遺跡	弥生～中世	33	原遺跡	弥生～中世
6	西野遺跡群	弥生・古墳・平安	20	東野遺跡	平安	34	高柳遺跡	弥生～中世
7	下ノ坪遺跡	平安	21	香宗城跡	中世	35	大領遺跡	古墳～中世
8	北尾遺跡	弥生	22	東野土居遺跡	古墳～平安	36	金池遺跡	弥生・平安・中世
9	高田遺跡	平安	23	下分渡崎遺跡	弥生	37	岩村土居城跡	中世
10	下井遺跡	平安・中世	24	十万遺跡	弥生～中世	38	田村遺跡群	縄文～近世
11	笹ヶ崎遺跡	弥生	25	原恵上段遺跡	古墳～近世	39	田村城跡	中世
12	深淵山古墳 (竹ノ西山古墳)	古墳	26	伏原遺跡	弥生～平安	40	土佐園分寺跡	奈良・平安
13	アゴアテ白石築跡	平安	27	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	41	北江塚寺跡	白鳳・奈良
14	大谷古墳	古墳	28	大塚古墳	古墳	42	土佐園府跡	弥生・中世

Fig. 3 周辺の遺跡分布図

かして米作りもむしろ施設園芸が盛んに行われている。また、宅地開発が目覚ましく、人口増加率は県下で群を抜いており、高知市のベッタウン化が急速に進んでいる。

2. 歴史的環境

野市町周辺は、長岡台地と野市台地との間に、土佐山田町神母ノ木を扇頂とする物部扇状地の低地が同心円状の等高線を描いて存在している。この低地は、物部川の形成したものであるが、扇端方向に向かって多くの小水路が流れている。しかも、物部川の旧水路は現河道よりも西寄りにあり、それも乱流していたことが判明している。この旧河道の西端、扇状地の低地南端に県内では最大の田村遺跡群がある。田村遺跡群は縄文以来、中世の環濠集落までの複合遺跡であり、高知県下最大の遺跡である。また、弥生時代前期の水田跡も発見されており、物部川河口流域の弥生時代初期の母村と考えられ、弥生文化初期農耕の伝播を知るうえで重要な遺跡である。

香宗川流域では、香我美町の下分遠崎遺跡、十万遺跡が縄文晩期の遺跡である。下分遠崎遺跡は、弥生時代初期の土器が発見されるとともに、多量の木器が出土したことで知られ、香宗川流域の弥生時代の集落の母村的役割を担っていたと考えられる。また、すぐ隣の曾我遺跡では、弥生時代の木製農具が最初に出土したほか、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・据柱礎石建物跡・櫓列・土抗・溝跡・柱穴多数が検出され、緑釉陶器・墨書土器・円面硯・転用硯・荷状木製品等が出土した。また、出土遺物の黒色土器・灰釉陶器・土師器等に搬入品が多く、中央との結びつきを想定させられ、宗我部の「郷家」あるいは、郡衙クラスの役所の存在が推定されている。

野市町内にも多くの遺跡が存在し、その歴史は深淵遺跡出土の遺物によって、縄文時代まで遡ることができる。弥生時代では、昭和62・63年度に行われた調査の結果、堅穴住居・掘立柱建物跡・溝跡等が検出され、それらに伴う遺物として、壺・甕・鉢・壺棺等が出土している。また、県下では発見例の少ない古墳時代の籬を伴う方形の大型堅穴住居が検出され、土師器の鉢・壺・甕、須恵器の杯・甕等が出土しており、この時期の県内における住居跡の性格を解明するうえで極めて貴重な発見となった。また、周辺には溝淵山古墳（竹ノ内山古墳）、大谷古墳、小山谷古墳等が築造されており、さらに、東方約2kmの本村には、瀬戸内地方の時代背景を受けて成立したとみられる弥生時代の高地性集落的な要素を持つ本村遺跡がある。

奈良・平安時代においては、掘立柱建物跡・櫓列・土抗・溝跡・瓦窯跡や工房跡とみられる遺構が検出されており、主な出土遺物として、鉦尾・二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・円面硯・風字硯等が出土していることから、特に8世紀代に居住者が直接・間接的に中央官衙または地方官衙に関係していたものと考えられている。

同町内には、この他にも条理遺構の可能性を持つホノギ名（中ノ坪・一ノ坪・大坪・四ノ坪）などが随所に見られたり、平安京大極殿・法勝寺等に左古山亀山窯の瓦が使用されたりしており、古代における土佐と中央との関係を知るうえで重要な窯跡も存在する。

このように、官衙関連の貴重な遺構や遺物が多く検出されたことにより、周辺の香美郡衙推定地と考えられる土佐山田町大領遺跡、南国市土佐国府跡、豪族の館を検出した香我美町十万遺跡等、官衙と密接に関連する遺跡として注目されてきた地域である。

〔参考文献〕

『野市町史』上巻 野市町教育委員会

〔角川 日本地名大辞典 高知県〕角川書店

高橋啓明・出原恵三・吉原達生 1988 『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会

高橋啓明・吉原達生 1989 『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会

高橋啓明・出原恵三・吉原達生 1989 『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会

坂本憲昭 1993 『野市町本村遺跡調査報告書』野市町教育委員会

出原恵三 1994 『下分遠崎遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

第三章 調査の概要

1. 調査の方法

調査は、5月に第一次調査を行った。調査対象地内に20箇所の試掘トレンチを任意に設定し、表土である耕作土及び旧耕作土を重機で除去した後、人力で掘り下げることにより遺構・遺物の有無を確認した。試掘トレンチの位置は、平板等で測量し、層序については柱状図、またはセクション図を作成した。

第2次調査は、第1次調査が行われた5月が施設園芸の時期であったため、試掘しきれていなかった部分について本調査の事前に試掘調査を行った。試掘調査は、圃場整備に伴うため調査範囲が広範囲に及ぶことから、調査対象地内の道路・用水路工事予定地を中心に、40箇所の試掘トレンチを設定し、遺構の範囲及び遺物の分布密度の把握をするために行った。トレンチの掘削には重機を使用し、表土・無遺物層等の掘り下げを行い、遺構及び遺物包含層の検出・掘り下げは人力により精査に努め、遺物を検出したトレンチを中心に調査区を設定し、本調査を実施した。本調査区は、遺構・遺物を検出した試掘トレンチのTR1を拡張し、調査I区とした。併せて農道をささみ、北側に調査II区を設定した。検出した遺構・遺物の出土状況、及び土層等については、写真撮影を行った後、平面図（S：1/10・1/20）及び断面図（S：1/20）を作成した。

なお、測量には、磁北を基準ラインとし、東西にアルファベット、南北に数字を付し、任意にグリッドを展開した。

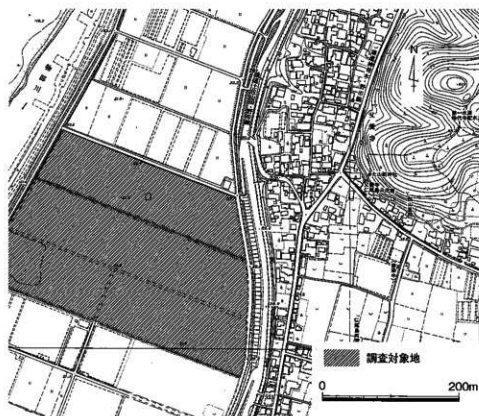


Fig. 4 調査対象地位置図

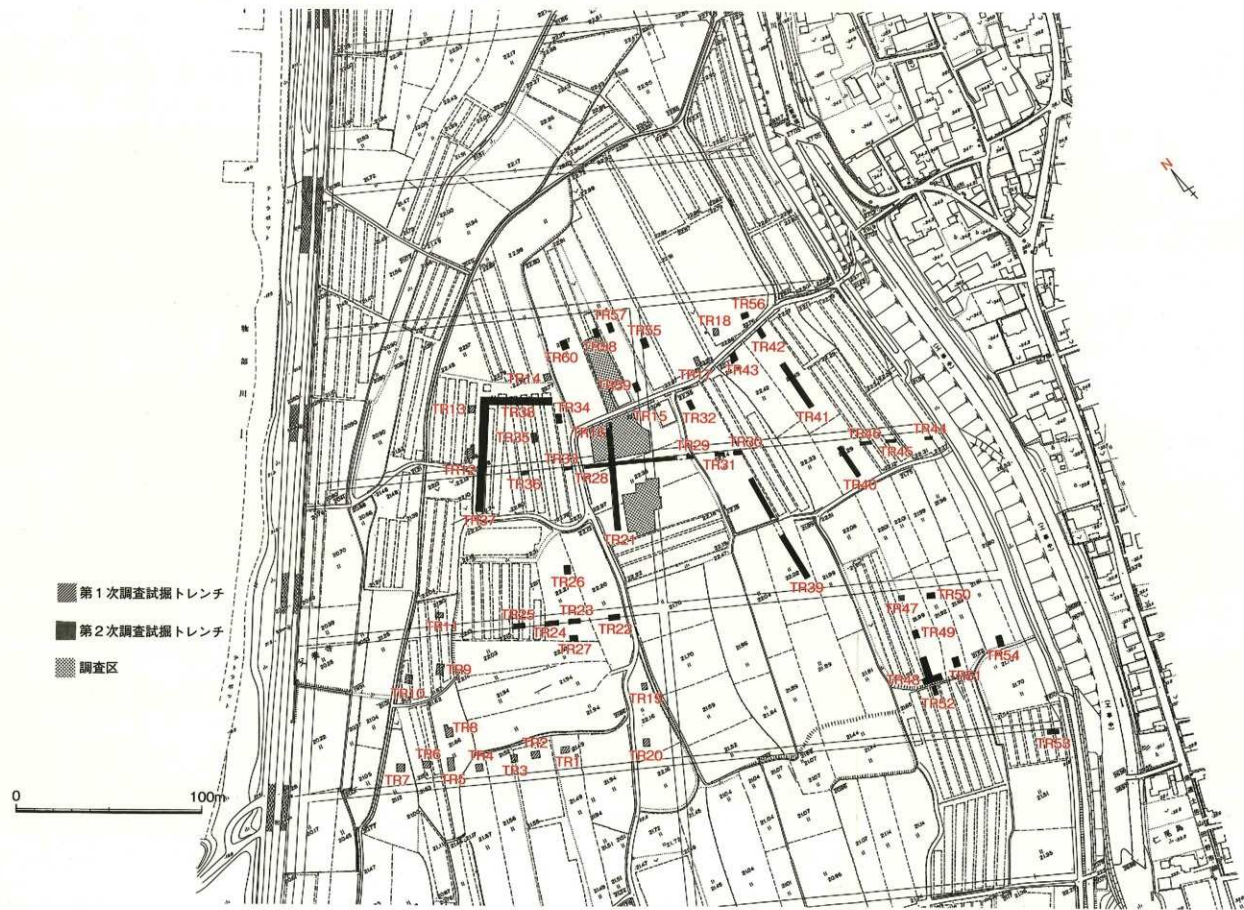


Fig. 5 試掘トレンチ及び調査区配置図

2. 1次調査の概要

調査対象地内に20箇所の試掘トレンチを任意に設定し、発掘調査を実施した。調査区が広範であり、層序及び遺物の出土状況は各トレンチごとに非常にばらつきがある。旧河川の流路の変遷によるものと思われる。

各トレンチでの遺構・遺物の出土状況は、以下の表に一覧する。

TR	検出遺構	出土遺物	TR	検出遺構	出土遺物
1		土師器, 須恵器, 瓦質土器	11		土師器, 須恵器
2		弥生土器, 土師器, 須恵器	12		縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 青磁
3	集石	土師器, 須恵器	13		土師器, 須恵器
4			14		土師器
5	集石	弥生土器, 土師器, 須恵器	15		弥生土器, 土師器, 須恵器, 黒色土器, 瓦質土器(鍋), 磁石
6			16	pit 5個	弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦質土器
7			17		
8		土師器, 須恵器	18		土師器
9		土師器, 須恵器, 青磁, 瓦質土器	19		須恵器
10		弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦片(布目)	20		土師器, 須恵器, 緑釉陶器

基本層序

ここでは第1次調査及び本調査において遺構・遺物を検出した試掘トレンチについての基本層序を取り上げる。先述したように、調査対象地は古物部川の影響により土層の堆積状況はプライマリーではない。

TR1 (Fig. 6)

調査対象地の南部に設定した2×5mのトレンチである。表土下約40cmで、土師器, 須恵器, 瓦質土器を含む遺物包含層(第IV層)を検出した。基本層序は、第III層まで東西にはほぼフラットに堆積しているが、第IV層・V層は現物部川のある西側に向かって傾斜している。

TR1での基本層序を以下に述べる。

第I層: 表土(耕作土)

第II層: 灰黄褐色粘質土(漸移層)

第III層: 黄褐色粘質土(礫混じる)

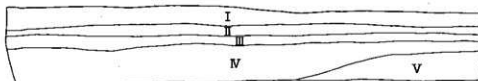
第IV層: 灰褐色粘質土(遺物包含層)

第V層: 灰褐色シルト層

TR5 (Fig. 6)

調査対象地南部, TR1の西側に設定した3×6mのトレンチである。表土直下で遺物包含層(第

DL : 22.00m



TR1 北壁セクション

- I 表土
- II 灰黄褐色粘質土 (薄移層)
- III 黄褐色粘質土 (礫混・床土)
- IV 灰褐色粘質土 (遺物包含層)
- V 灰褐色シルト

DL : 22.00m



TR5 東壁セクション

DL : 22.00m

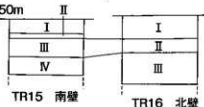


TR5 南壁セクション

- I 表土
- II 灰黒黄色粘質土
- III 淡灰黄色粘質土
- IV 濃灰黄色粘質土
- V 灰褐色粘質土
- VI 黒褐色シルト (固い・鉄分を多量に含む)
- VII 砂礫



DL : 22.50m



TR15 南壁

TR16 北壁

TR15

- I 表土
- II 黄褐色粘質土
- III 暗灰褐色粘質土
- IV 明灰褐色粘質土

TR16

- I 表土
- II 灰褐色粘質土
- III 灰黒褐色砂質土 (礫混)

Fig. 6 試掘トレンチセクション図

II層)を検出した。第II層からV層までが遺物包含層であり、弥生土器・土師器・須恵器等が出土している。また、V層直上(標高21.890m)で、直径15cm前後を測る円礫の集石が認められるが、規模・性格等は不明である。

TR5での基本層序を以下に述べる。

第I層:耕作土

第II層:灰黒黄色粘質土(遺物包含層)

第III層:淡灰黄色粘質土()

第IV層：濃灰黄色粘質土（遺物包含層）

第V層：灰褐色粘質土（ ）

第VI層：黒灰色シルト（鉄分を多量に含む）

第VII層：砂礫層

TR15・16 (Fig. 6)

調査対象地中央部やや北寄りに設定した2×2mのトレンチである。表土及び床土直下で遺物包含層（第III層）を検出した。包含層は層厚20~30cm前後で堆積しており、土師器、須恵器、黒色土器等、古代の土器を中心とする遺物の出土が見られた。また、TR16ではIII層上面と下面で直径30cm前後を測るPitを5個検出した。遺構埋土は暗褐色粘質土であり、III層との色調の差が見極めにくく、プランは、やや不明瞭である。

第I層：耕作土

第II層：黄褐色粘質土（床土）

第III層：灰褐色粘質土

（遺物包含層）

III層：暗灰褐色粘質土

（遺物包含層）

第IV層：明灰褐色シルト

第V層：灰黒褐色砂質土

3. 2次調査の概要

調査区内に設定した試掘トレンチのうち、遺構を検出したのはTR21のみである。他のトレンチについては、TR48で須恵器の甕が出土しているが、ほとんどが流路の影響による礫層及びシルト層で、若干の遺物を含んでいるが、ローリングを受け、且つ細片であり、流路による流れ込み遺物と考えられる。TR21では、表土下20~30cmで暗褐色粘質土の遺物包含層を確認し、10世紀代を中心とする土師器・緑釉陶器・須恵器等が出土している。この遺物包含層は北部で厚く、南に向かうほど薄くなっており、中央部は流路による

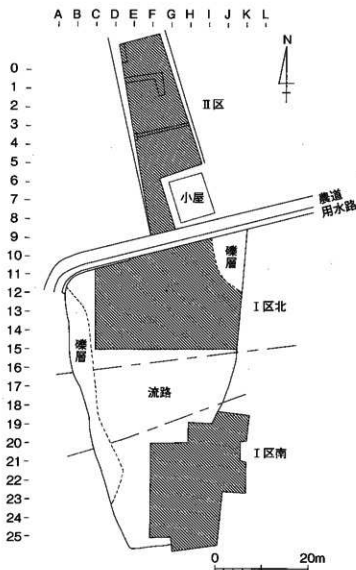


Fig. 7 調査区設定図

影響で切られている。このため、TR21の北部で遺構・遺物の残存状況が良好であると判断したため、この部分を中心に調査区を拡張し、本調査を実施した。

調査区は、TR21を中心に調査区を拡張して、北部をⅠ区北、南部をⅠ区南と呼称し、併せて遺物包含層の拡がりと考えられる農道より北側にⅡ区を設定して調査を行った。

Ⅰ区北

TR21の北部を中心とする調査区で、遺物包含層は東西は礫層、南は流路によって切られている。Ⅰ区北では、表土下30cmでピット、溝等の遺構が検出された。検出面は黄褐色シルト層であり、遺構埋土は包含層である暗褐色粘質土である。検出された遺構はピット75個、土抗2基、溝6条、性格不明遺構3基であり、主な遺物としては、桶葉型の黒色土器碗をはじめ、10世紀代の土師器杯・皿等がまとも出土している。特に、G-9グリッド内において完形土器が集中して出土した。遺構では、SK1、Pit60より杯・皿・甕等が出土しており、一括性のある遺物として抑えることができる。他のピットや溝からの遺物はどれも僅少且つ細片であり、摩耗している物が多く詳細は不明である。

Ⅰ区南

TR21の南部を中心とする調査区であり、Ⅰ区北とは異なる灰褐色粘質土の包含層を検出した。包含層中からは、多量の土師器・瓦器・須恵器等が出土し、中には輸入陶磁器の破片もみられる。この包含層（第Ⅲ層）は厚さ15～5cmを測り、Ⅰ区の中央部に境に南にしか認められず、Ⅰ区南の南端に向かって薄くなっている。包含層下には黄褐色シルト層が堆積しており、このシルト層上面において遺構を検出した。検出された遺構は、掘立柱建物2棟、ピット88個、溝10条であり、南調査区の東北部に比較的集中している。特に、SD12・13において土師器の杯・碗・皿・須恵器の甕等が出土しており、一括性のある遺物として抑えることができる。さらに、これらの溝によって方形に区画される内側では、SBを2棟検出した。また、検出されたピットの中でPit82・88では、完形の土師器杯・皿がそれぞれ2個体重なった状態で出土した。検出された遺構埋土は、包含層と同じ灰褐色粘質土で単一層である。他のピットや溝からの出土遺物はその量が僅少であり、摩耗している物が多く詳細は不明である。

Ⅱ区

調査Ⅰ区の北側に設定した調査区である。当初、Ⅰ区北の調査区北端部において、完形の土師器杯・皿等が一括して出土したため、北側に調査区を拡張した。Ⅱ区はⅠ区に比べ標高が50cmほど高い。Ⅱ区の南部においてⅠ区北で認められる同一の暗褐色シルトの包含層を検出した。この包含層は、北に向かって薄くなっており、調査区の中央部で消滅する。Ⅱ区においては、土抗1基、溝1条を確認した。溝は、調査区のはほぼ中央部を東西方向に延びており、埋土は直径2～3cm大の砂利層である。深さは5～10cmを測り、遺物は出土しなかった。土抗は、調査区の南部で検出されている。直径が1m前後を測る平面不整形の土坑である。遺構埋土は包含層の暗褐色シルトであり、土師器片が出土したが、いずれも細片且つ摩耗が著しく詳細は不明である。Ⅱ区では、包含層中より須恵器の甕片・土師器の杯等の完形品、緑釉陶器片等が出土しているが、その出土量は南部に集中している。

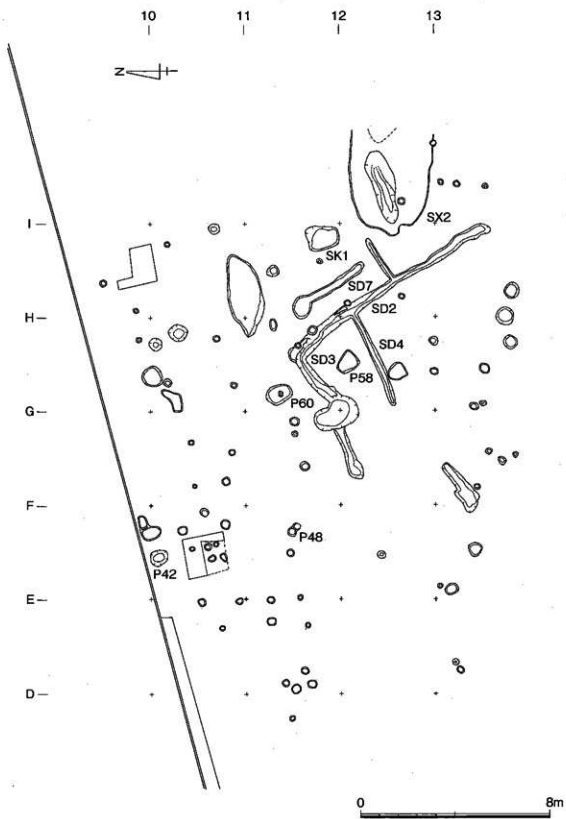


Fig. 8 I区北検出遺構全体図

第IV章 遺構と遺物

1. I区北

(1) SK1

調査区I区北の東寄りH-11グリッドに位置する。長軸1.3m、短軸0.9mの隅丸長方形のプランを呈す。検出面からの深さは、20~30cmを測る。断面形は、逆台形状を呈し、西側に向けて緩やかに傾斜する。埋土は、Ⅲ層包含層と同じ暗灰褐色粘質土であり、黄色シルトのブロック及び、少量の炭化物を含む。西側には、SD2・3・4・7が検出されているが、SK1に伴うものかは不明確である。

出土遺物は、土師器・須恵器の細片を主として370点であるが、いずれも摩耗が著しく、図示できるものは1~6の6点である。1は、ロク口成形の杯である。平底から斜上外方に立ち上がる。口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさめる。底部切り離しは、回転ヘラ切りによる。2もロク口成形の杯であり、丸味を帯びた平底

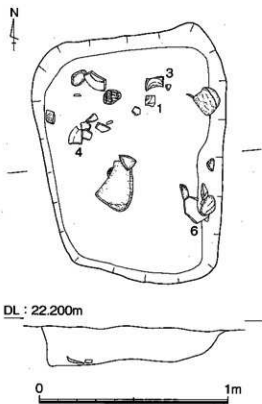


Fig. 9 SK1 平面図・断面図

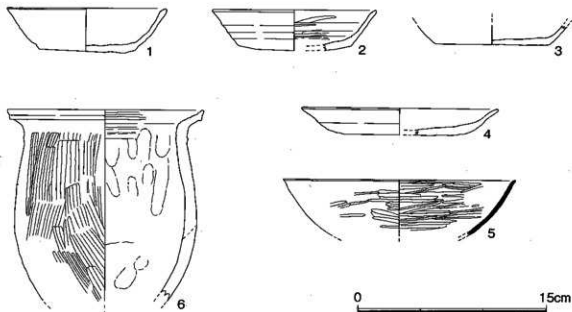


Fig. 10 SK1 出土遺物

から斜上外方に直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。底部切り離しは、回転ヘラ切りによる。内面は、ヘラ磨きが施され、3条の平行線状の沈線が巡る。3・4はロクロ成形による土師器皿であり、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。5は黒色土器の碗である。内黒のA類で、口縁端部は僅かに外反し、口唇部は尖り気味に仕上げる。内外面ともヘラ磨きが施されるが、内面は特に丁寧に施す。6は寛である。下膨らみの胴部から口縁部は大きく外傾し、端部は上方に拡張する。口縁端部外面は、浅い凹面を成す。胴部外面上半は縦方向、下半は不定方向、口縁部内面及び胴部上端内面は横方向のハケ調整を施す。胴部内面には指頭による強いナデ調整を施す。細片の中には、搬入品とみられる堯や黒色土器、緑釉陶器の細片も1点含まれている。

(2) Pit60

調査区Ⅰ区北のほぼ中央部、G-11グリッド内に位置する。長軸1.8m、短軸0.8mの楕円形のプランを呈し、深さは17~25m前後を測る。埋土は包含層である暗褐色シルト層である。出土遺物は、図示した土師器杯7・8、須恵器杯9、黒色土器碗10、土師器皿11の他に弥生土器細片が僅少、土師器細片143片、須恵器細片14点、緑釉陶器細片1点が出土している。7はロクロ成形であり、底部は丸味を帯びる。口唇部は尖り気味に仕上げ、底部外面は回転ヘラ切り痕が残る。8は摩耗が著しく内外面とも調整は不明確である。9は須恵器杯の底部であり、高台の外面下半部は斜めに面取りしている。10は黒色土器A類の碗底部である。「ハ」の字状に開く高台高6mmの高台端部は尖り気味に仕上げる。11は土師器の皿であり、平底から斜上外方に立ち上がる。口縁端部は外反し、口唇部は丸くおさめる。口縁端部内面には1条の沈線を施す。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

また、ピット中央部床面には、径22cm、深さ28cm前後を測る小ピットが検出され、土師器細片2点が出土している。(佐竹)

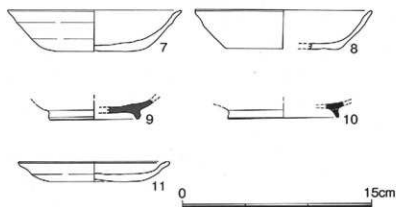


Fig. 11 Pit60 出土遺物

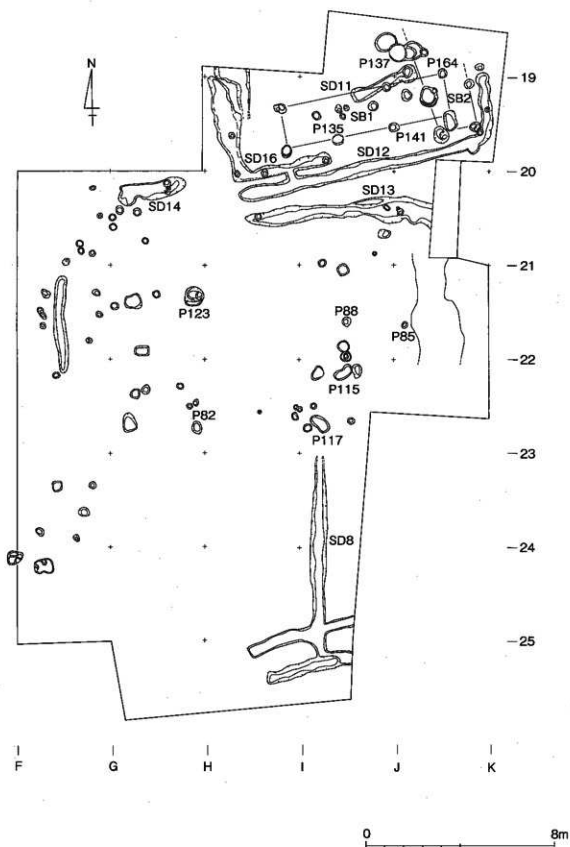


Fig. 12 I区南核出遺構全体図

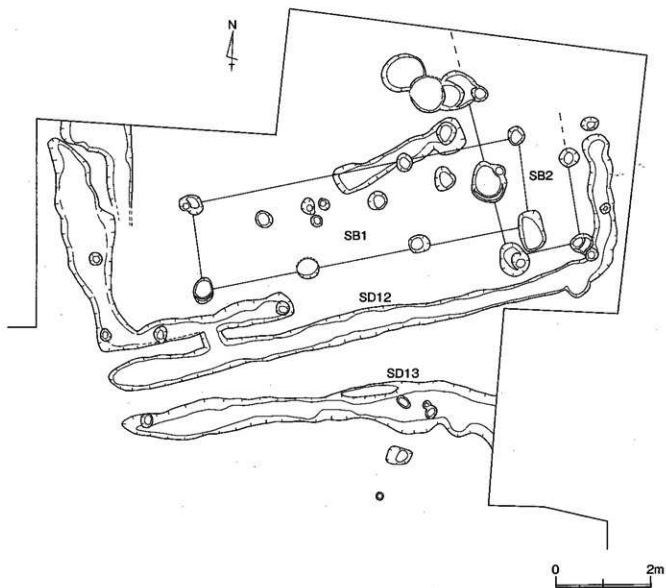


Fig. 13 I区南SB 1・2, SD12・13 遺構配置図

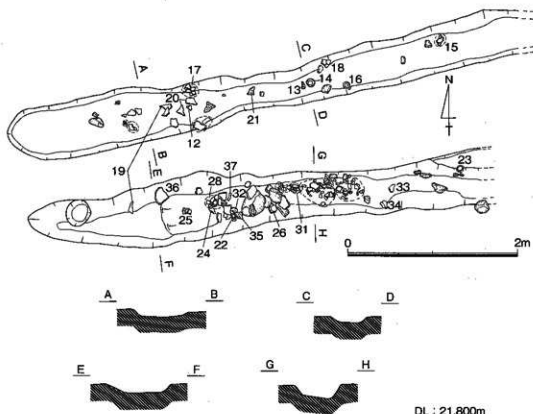


Fig. 14 SD12・13 遺物出土状況図

2. I区南

(1) SD12

調査I区南の北東部に位置する。遺構検出面は黄褐色シルト層であり、標高21.65~21.80m前後を測る。溝の幅50~80cm、深さ20~30cmを測り、プランは東西に延び、東端部で北にはほぼ直角に屈折する。遺構埋土は第Ⅲ層の包含層と同じ灰褐色粘質土である。

出土遺物は、I-20グリッドで集中して出土している。12~14は土師器の皿である。いずれもロクロ成形、回転ナデ調整によるもので底部切り離しは回転糸切りである。平底から斜上外方に立ち上がり、口縁部は外反する。12は口縁端部が僅かに肥厚する。15は土師器の杯であり、形骸化された円盤状高台から内湾気味に立ち上がる。ロクロ成形で、底部外面は回転糸切りによる。16も土師器の杯であり、高い円盤状高台から斜上外方に立ち上がる。底部内面は、段を有し、底部外面には回転糸切り痕が認められる。17は、土師器の椀である。口径が15.5cmと大きく、形骸化された円盤状高台から斜上外方へ直線的に立ち上がる。口縁端部は僅かに外反しながら肥厚する。口唇部は丸くおさめる。

18は瓦器椀である。形骸化された円盤状高台から内湾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反して口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切りである。19は須恵器の甕である。口縁部は強い横ナデにより大きく外反し、端部は水平な面を成す。体部外面は、横方向の平行叩き、内面はヘラ状工具によるナデ調整を施す。20も須恵器甕の副部片である。外面は横方向を基調とする平行叩き、内面はヘラ状工具によるナデ調整を施す。21は平瓦片である。内面に布目痕が認められる。厚さ1.5cmを測り、色調は灰白色を呈し、硬質である。

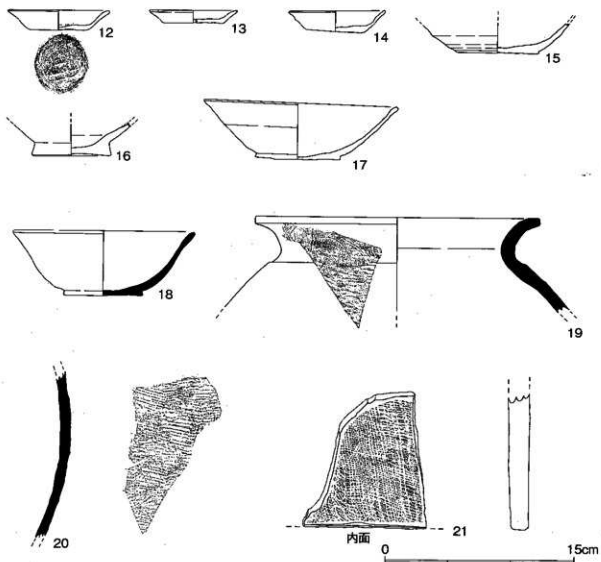


Fig. 15 SD12 出土遺物

(2) SD13

調査区 I 区南の北東部に位置し、SD12に平行している。検出面は、SD12と同じ黄褐色シルト層上面で検出した。溝の幅50~95cm、深さ15~30cmを測り、遺構埋土はSD12と同じ灰褐色粘質土の単一層である。プランは東西に延び、調査区東端で不明確になる。

出土遺物は、I-20グリッドで集中して出土している。22・23は土師器の皿である。いずれもロクロ成形、回転ナデ調整で、底部切り離しは回転糸切りによる。体部が斜上外方に直線的に立ち上がるタイプ(22)、口縁部が外反し、端部が肥厚するタイプ(23)がある。(24・26~28)は土師器の椀である。いずれもロクロ成形、回転ナデ調整で、底部切り離しは回転糸切りによる。24・27・28の体部は、斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部は、僅かに肥厚しながら外反する。底部は、円盤状高台が形骸化されたベタ底を呈する。29は須恵器の杯である。円盤状高台から斜上外方に立ち上がる。内外面とも摩耗が著しく、調整は不明である。底部切り離しは回転糸切りによる。30は、

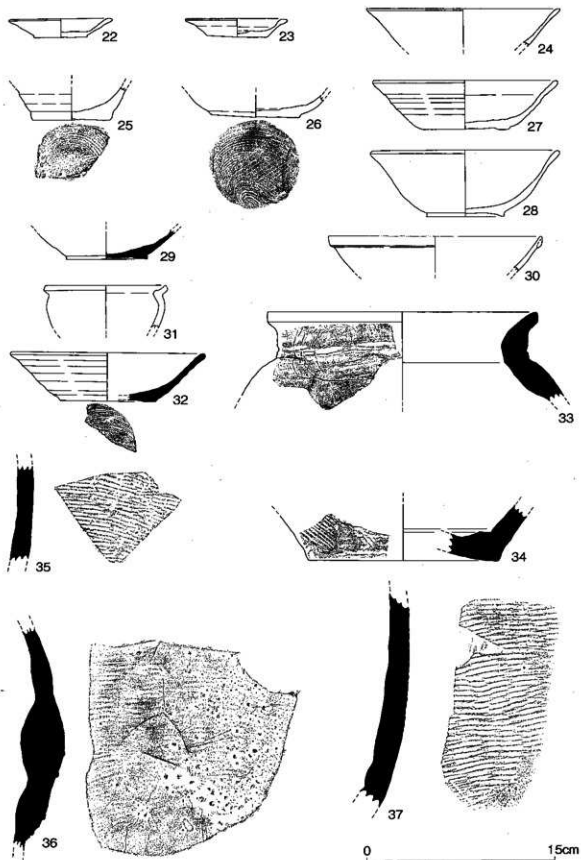


Fig. 16 SD13 出土遺物

白磁の碗（IV類）である。直線的な体部であり、口縁部は玉縁を持つ。色調は灰黄色を呈し、釉は全体的に薄く施軸されており、気泡が目立つ。31は土師器のミニチュアの甕である。内湾する体部から口縁部は外反し、端部を上方につまみ上げる。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。外面には、煤の付着が認められる。32は須恵器の杯である。平底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。調整は、ミズビキ回転ナデ、底部切り離しは回転糸切りによる。33・34は須恵器の甕である。33は内傾する胴部から頸部は直立し、口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は面を成す。器壁は分厚く、胴部外面は、横方向の平行叩き、内面は当て具の痕跡か凹凸が目立つ。頸部から上は内外面ともナデ調整を施す。34は底部中央部に向けてやや凹む。胴部外面は右上がりの平行叩きが認められ、内面は底部にヘラ削りにより段差が生じる。35～37は須恵器の甕の胴部片である。外面は、いずれも横方向を基調とする平行叩きが認められ、自然釉がかかる。胎土には0.5～1.3 cm大の角礫が含まれており、胎土の持つ鉄分が融解し内外面に点々と付着している。粗い胎土のため、未熟な叩き成形では空気が入り易く、36は火膨れている。色調は全て、内面が明褐色を呈する。

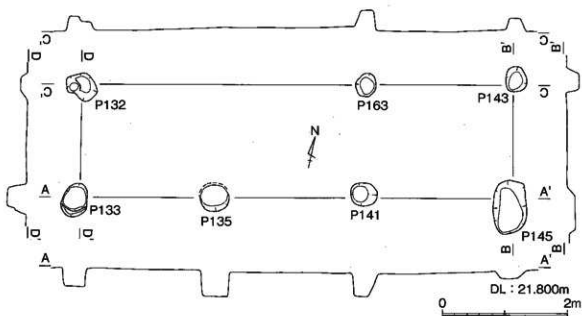


Fig. 17 SB1 遺構図

(3) SB1

調査区Ⅰ区南の北東部で検出した。梁間1間(2.10m)、桁行3間(6.10m)とみられる東西棟建物で、東西側柱の柱穴1個が未検出である。SD12の北側に位置し、棟方向が同溝と平行に延びる。柱間寸法は梁間2.10m、桁行2.20m前後を測る。柱穴は径40~60cmの円形で、埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物は、P135・141から土師器の杯が出土している。他のピットでは遺物の出土は皆無であった。38は、P135から出土した土師器の杯である。平底から、斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切り底で、調整は口縁部から内面にかけてナデ調整、内底部及び体部外面は未調整である。

39は、P141から出土している。平底から外方に直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部外面は回転糸切り底を呈し、調整は口縁部から内面にかけてナデ調整、内底部及び体部外面は未調整である。38に比べ、器高が低く法量分化が認められる。

(4) SB2

調査区Ⅰ区南の北東部で検出した梁間1間(2.00m)、桁行2間(4.70m)以上とみられる南北棟方向建物である。SB1と重複し、SD12に沿うように北に延びる。柱間寸法は梁間2.00m、桁行2.40m前後を測る。柱穴は径40~55cm前後の円形と、径70cm前後の不整形プランである。P138・144・146はそれぞれ径20cmの小ピットが重複している。埋土はSB1と

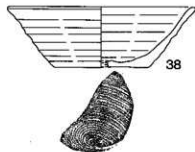


Fig. 18 Pit 135・141 出土遺物

同じ灰褐色粘質土である。出土遺物は、P138・144から土師器の細片が僅少出土しているが、いずれも図示できなかった。他のピットからの遺物の出土は皆無である。

(5) Pit82

調査区Ⅰ区南のほぼ中央部に位置する。長軸0.52m、短軸0.42mの楕円形のプランを呈し、深さは16~20cm前後である。埋土は包含層と同じ灰褐色粘質土で単一層であるが、下部は色調がやや黒く粘性が強い。ピット底面中央部には、柱径20cm、深さ46cmを測る柱痕が認められる。出土遺物は、土師器の細片が70点余りと圧倒的に多いが、検出面から13cm前後掘り下げた埋土中より完形の杯(40)・(41)が重なった状態で出土した。40・41はロクロ成形で、内面ナデ調整、外面は未調整である。底部は回転糸切り底を呈し、円盤状高台が形骸化している。また、埋土中より瓦器椀(42)が出土している。断面逆三角形の低い高台を有し、口縁端部内面に1条の沈線が施されている。特徴からみて、楠業産(b-Ⅲ期)のものと思われる。

(6) Pit88

調査区Ⅰ区南の中央部東よりに位置する。径36~42cmの不整円形のプランを呈し、深さは51cm前後である。埋土は包含層と同じ灰褐色粘質土である。検出面上に直径40cm、厚さ5cm前後を測る扁平な凹み石(43)が露出していた。この凹み石を取り上げ、遺構埋土を掘り下げると完形の土師器小皿(44)が壁際から出土した。凹み石除去後の埋土は多量の炭化物を含んでおり、埋土中より土師器・瓦器の細片が出土しているが図示でき得たものは45のみである。44・45ともナデ調整、底部外面は回転糸切り底である。

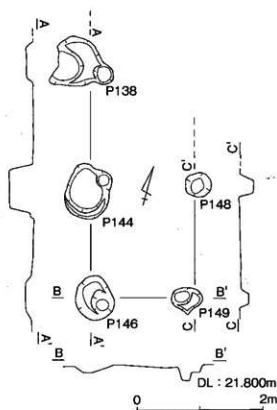


Fig. 19 SB2 遺構図

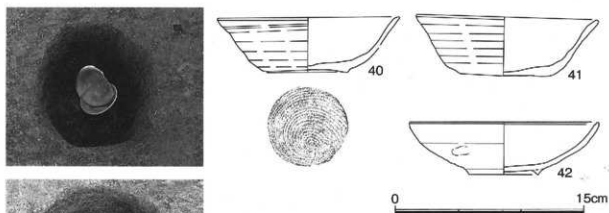


Fig. 20 Pit82 出土遺物

P82杯(40・41)出土状況及び完掘状況

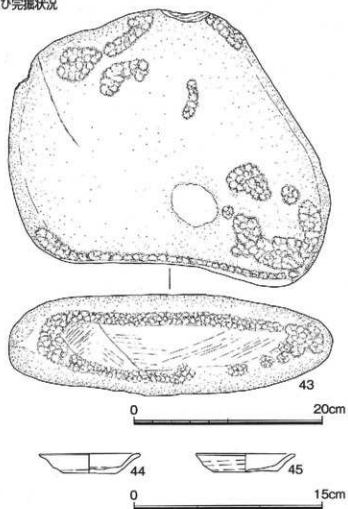


Fig. 21 Pit88 出土遺物

包含層出土遺物

今回出土した遺物は、そのほとんどが包含層から一括して出土しているが、I区北と南ではその様相を異にしている。ここでは、I区北包含層とI区南包含層から出土した遺物について分別し、器種ごとに分類を行った。

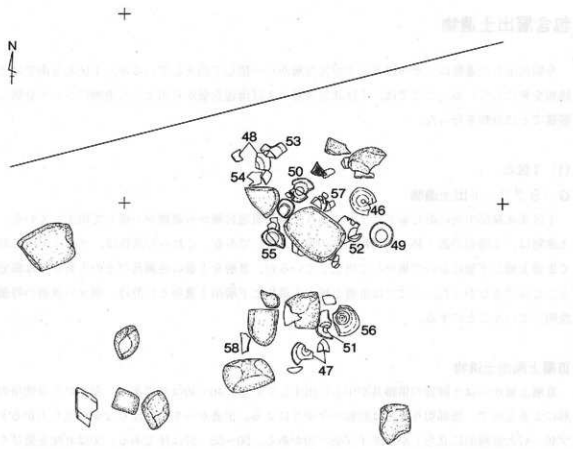
(1) I区北

G-9グリッド出土遺物

I区北北端部中央にあたるグリッドであり、第Ⅲ層包含層から遺物が一括して出土している。出土遺物は、土師器の皿・杯・碗黒色土器の碗(A類)である。これらの遺物は、グリッド内においてⅢ層上層と下層において集中して出土しているが、Ⅲ層を土層の色調及びその土質からは細分することはできなかった。ここではⅢ層上層出土遺物と下層出土遺物とに分け、個々の遺物の特徴を説明していくことにする。

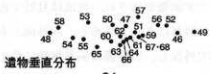
Ⅲ層上面出土遺物

Ⅲ層上層からは土師器の供膳具が中心に出土している。46-49は皿であり、全てロクロ使用の成形によるもので、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。平底からやや外反しながら立ち上がるタイプ46・47と直線的に立ち上がるタイプ48・49がある。50-55・57は杯である。50は丸味を帯びた底部から斜上外方に直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。分量は小さく小杯に分類できる。体部内面はナデ調整が施され、底部内面にはロクロ目が残る。内面にタールの付着が認められる。51は平底からやや段を持ちながら斜上外方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は尖り気味に仕上げる。内外面ともナデ調整が施され、焼成は良好である。52は平底から斜上外方に僅かに外反しながら立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施す。53は斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部で外反し、口唇部は尖り気味に仕上げる。内面は煤ける。54-57は平底の底部からやや段を持ちながら立ち上がるタイプのものである。54-56の内底部は凹む。54は内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。55は内湾気味に立ち上がり、口縁部にかけて直線的である。口唇部は丸くおさめる。56は内底部の凹みが他に比べ明瞭である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は尖り気味に仕上げる。内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土及び全体的な色調は灰白色を呈する。57は底部から直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。内面は丁寧なナデ調整を施す。58は「ハ」の字型に開く断面方形の高い高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。



Ⅲ層上面出土狀況

DL:22.300 m+



遺物垂直分布

Ⅲ層下面出土狀況



Fig. 22 G-9 GridⅢ層遺物出土狀況圖

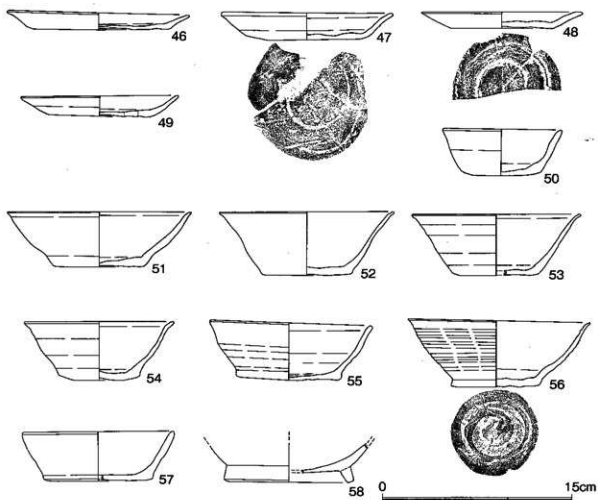


Fig. 23 G-9 Grid III層上面出土遺物

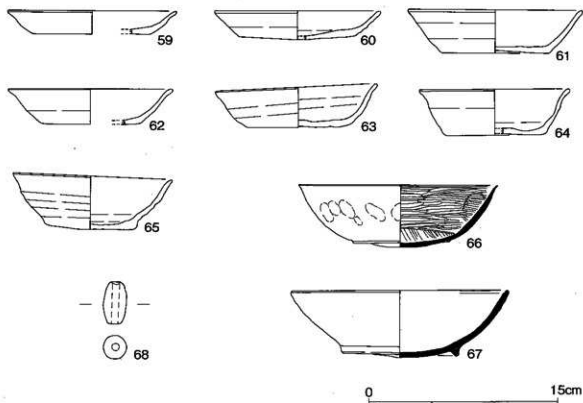


Fig. 24 G-9 Grid III層下面出土遺物

皿層下面出土遺物

59・60は土師器皿である。59の口縁部は外反する。内外面ともナア調整。60は斜上外方に直線的に立ち上がる。内外面ともナア調整を施す。59・60ともロクロ成形、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。61～65は土師器杯である。何れもロクロ成形、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。61は平底から斜上外方に直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。62・63は斜上外方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸くおさめる。内外面ともナア調整を施す。64は体部中位から外反し、口縁端部は肥厚して丸味を帯びる。内外面ともナア調整。65は平底からやや段を持って斜上外方に立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。内底は凹む。66・67は黒色土器碗である。66は内面黒色のA類である。断面逆三角形の低い高台が付く。丸味を持つ底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は僅かに外反して口唇部は尖り気味に仕上げる。口唇部内面直下には1条の沈線が認められる。内面は丁寧なヘラ磨きが密に施され、釣針状の暗文が認められる。外面は指頭圧痕が顕著である。67は「ハ」の字型に開く高台が付く。丸味を帯びた底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部はまるくおさめる。口唇部内面直下に沈線が認められるが摩耗が著しく周縁には至っていない。68は土錘である。紡錘形を呈する。全長3.3cm、全幅1.9cm、孔径0.6cmを測り、重量は13.1gである。

土師器

土師器は、供膳具及び煮沸具が中心に出土している。ここでは供膳具について以下のとおり形態分類を行い、その他については個々の特徴を説明していくことにする。

皿

全て、ロクロ成形であり、回転ナア調整が施される。底部切り離しは、回転糸切りとヘラ切りによるものがあり、底部切り離し痕の差で大きくA類（ヘラ切り）、B類（糸切り）とし、口径が8cm内外を測るものを小皿、12cm以上を測るものを皿とした。さらに、形態、底径指数等で細分類を行った。

A類（回転ヘラ切り）

A-I類：底部から外上方に直線的及び、やや内湾気味に立ち上がるタイプのものであり、底部の形態、及び器高により以下に細分する。

A-I a：底部が丸味を帯びるタイプ（73）

A-I b：器高が1.5cm前後を測り、やや内湾気味に立ち上がるタイプ（74）

A-II類：外反するタイプのものであり、器高が1cm内外で、口縁の端部を短く外反させるもの（75・76）と、器高が1.4cm内外を測り、底部から外反しながら立ち上がるタイプのもの（77）がある。

B類（回転糸切り）

底部切り離しが回転糸切りであるB類の皿は、全て小皿である。I区南を中心に出土している。

B-I類：底径指数が70%をこえる（5.6cm以上）もの（69・184）

B-II類：底径指数が51～68%を示すものである。口縁部の形態により以下に細分する。

B-II a：口縁部が外反するタイプ（70・71・180）

B-II b：底部から直線的に立ち上がるタイプ（72・179・181・182）

B-III類：器高が1.7cm以上を測り、器形が杯に分類し得るものである。口縁部の形態により以下に細分する。

B-III a：口縁部が外反するタイプ（183）

B-III b：底部から直線的に立ち上がるタイプ（178）

杯

杯は底部の形態でA、A'、B、C類と大きく分け、底部切り離しが回転ヘラ切りと、回転糸切りによるものが認められるため、底部切り離し痕の差でそれぞれI類、II類とした。さらに、全体の形状を窺い知ることのできるものは底径指数等で細分する。

A類：平坦な底部を有する。

A-I類：底部外面に回転ヘラ切り痕が認められるものである。口縁部の形態によりa、b類とし、さらに器高及び傾斜指数等で以下に細分した。

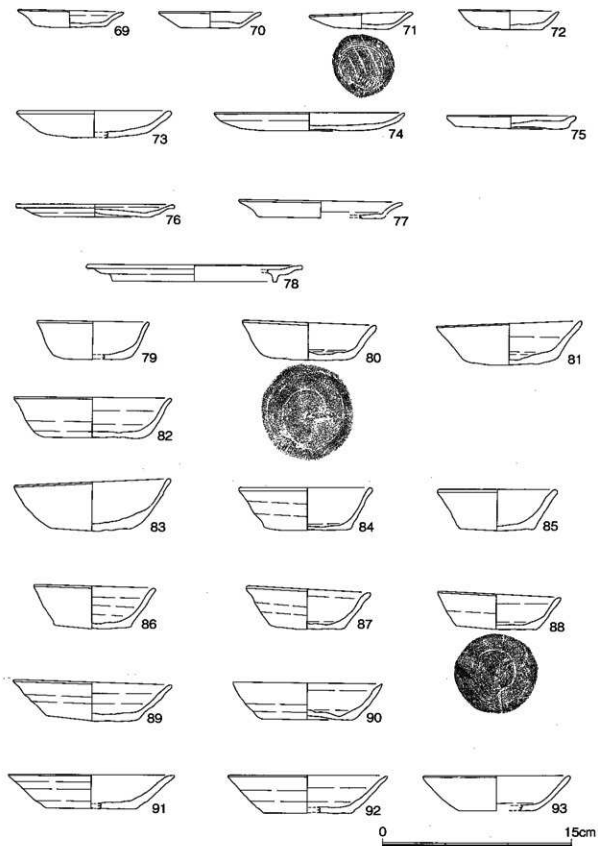


Fig. 25 包含層出土遺物 1 (土師器皿・杯)

A-I a類：直線的に立ち上がるタイプのものである。底径指数が53~67%，口径指数が27~37%を示し，その差が10%内外であるため傾斜指数で細分類した。

A-I a2：傾斜指数が70%代（71~79%）を示し，やや緩やかに立ち上がるもの（89・90）

A-I a3：傾斜指数が80%以上（81~111%）のもの（91~94）

※60%を示すものはない。

A-I b類：外反して立ち上がるタイプのものである。器高により細分類を行った。

A-I b1：器高が3cm内外を測るもの（95・96）

A-I b2：器高が3.5cm内外を測るもの（97~101）

A-I b3：器高が4cm以上を測るもの（102~105・107）

A-II類：底部外面に回転糸切り痕が認められるものである。調整手法の違いで以下に細分した。

A-II a：内面は丁寧なナデ調整が施され，体部外面にロクロ痕が認められるもの（186~188）

A-II b：内外面ともロクロ痕が認められるもの（110・189）

A'類：底部が丸底気味を呈するもの（79~83）

B類：輪高台を有するもの（111）

C類：円盤状高台を有するものである。底部外面は回転糸切り痕が認められる。底部の形態により以下に細分類した。

C-I a：底部内面に段を有するタイプ（190）

C-I b：底部が分厚く，柱状を呈するタイプ（191）

椀

椀は，全体の形状が判るものが少なく椀か杯か判別しづかったが，ここでは底部から内湾気味に立ち上がるものを椀とした。底部の形態をみれば円盤状高台のものと輪高台のものが認められる。杯同様，底部の形態によってA類，B類とし，B類については高台の形態により細分する。

A類：円盤状高台を有するものである。底部外面は全て回転糸切り痕が認められる。（114・115・192・193）

B類：輪高台を有するものである。高台の形態により以下に細分する。

B-I類：「ハ」の字形に開く高台であり，外底部に筥切り痕が認められるもの。（113・116・117）

B-II類：低高台のもの。高台の形状で以下に細分する。

B-II a：断面逆台形状の高台で，やや外方に踏ん張るタイプ（118・120）

B-II b：断面方形の高台で，直線的なタイプ（119・121）

B-II c：丸味を帯びた低い高台のもの（194~196）

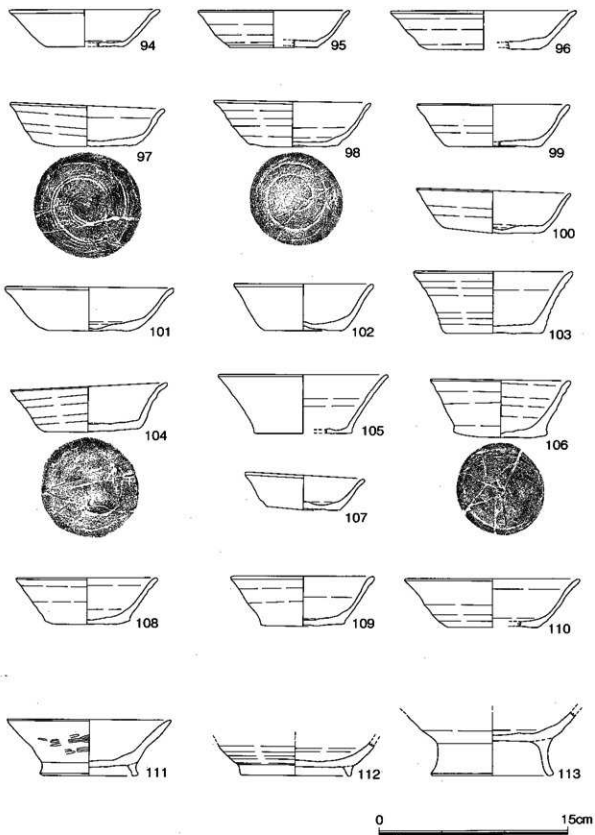


Fig. 26 包含層出土遺物 2 (土師器杯)

I 区北

土師器供膳具

皿 (Fig. 25-69~78, Fig. 31-178~184)

69~72は小皿である。72は斜上外方に直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面一部に赤色顔料が認められる。底部切り離しは、何れも回転糸切りである。71は回転糸切り痕とともに簾状の圧痕が認められる。73~78は皿である。75・76は底部から斜上外方に外反して立ち上がり、口唇部は75は丸く納め、76は面を成す。78は断面方形の高台が付く台付皿である。口縁端部は水平に引き出し、口唇部は面を成す。

杯 (Fig. 25-26-79~113)

全てロクロ成形、回転ナデ調整によるものであり、底部切り離しは回転ヘラ切りによる。79~83はA'類であり、底部全体が丸味を帯びる。外反気味に立ち上がるもの(79~82)が主であるが、83の様に内湾ぎみに立ち上がり、法量も大きめのタイプのものも存在する。84~88はA-I a1タイプのものであり、底部から外上方にきつい傾斜で直線的に立ち上がる。器高は、3.5cm内外を測るものが多い。89・90はA-I a2タイプのものであり、A-I a1タイプのものより器高が3.0cm前後と低く、口径が12cm前後を測り、体部の立ち上がりがやや開き気味である。89のように口唇部を丸めるものと、90のように尖り気味に仕上げるものが認められる。91~94はA-I a3タイプのものであり、口径と底径の差が大きく、体部が外側に開く。器高も3cm以下であり、器形的にみれば皿に近い。95~110は外反するタイプのものである。95・96は器高3cm内外を測るA-I b1タイプのものである。95は平底から僅かに段をもちながら斜上外方に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は丸くおさめる。97~101は器高3.5cm内外を測るA-I b2タイプのものである。97は体部底部内面にロクロ目が認められる。99・101のように口縁部が外反しながらやや、肥厚するタイプのものがある。102~105は器高4cm以上を測るA-I b3タイプのものである。体部下半から外反しながら立ち上がる。102は体部外面にタールの付着が認められる。106~110は底部から体部にかけてやや段を持ちながら立ち上がるタイプのものである。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切り離しは回転ヘラ切りである。106は内底がやや凹む。109の口縁は外反しながら端部がやや肥厚する。111は輪高台B類の杯である。断面方形を呈し、「ハ」の字に開く高台を持つ。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施される。

椀 (Fig. 26-27-112~121)

112~121は椀である。112は断面逆台形状の高台が付く。ロクロ成形。113は足高の高台であり、「ハ」の字形に開く。内外面とも回転ナデ調整が施され、底部内面には指頭圧痕が顕著に残る。114・115は円盤状高台の椀である。底部外面に回転糸切り痕が認められる。114は底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。116は「ハ」の字形に開く足高の高台である。底部内面にはロクロ目が残り、外底部にヘラ切りの痕跡が認められる。117は「ハ」の字形に開く高台が付くが下方は欠損している。高台の張り付け部は粗雑であり、段が生じる。体部は斜上外方に直線的

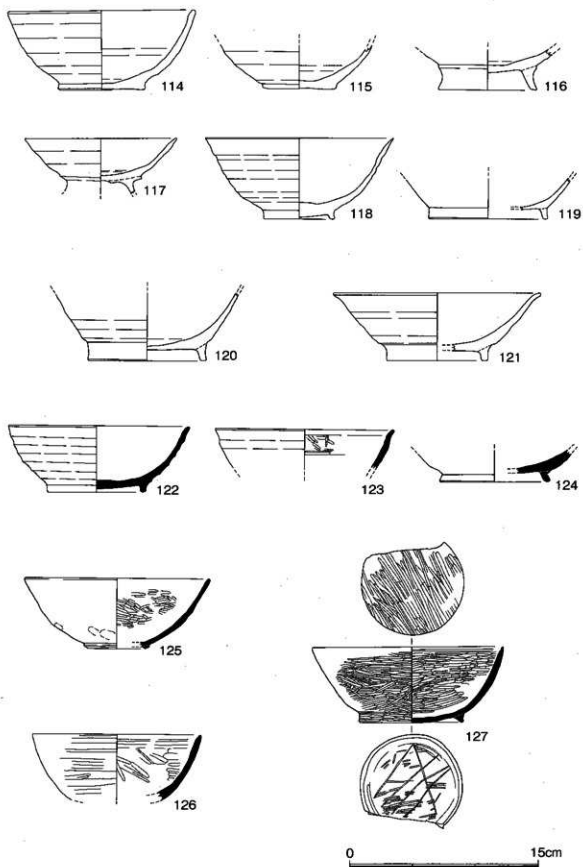


Fig. 27 包含層出土遺物3 (土師器碗, 黑色土器碗)

に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。外底部にヘラ切り痕が認められる。118は断面方形の低い高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。ロクロ成形であり、内面は丁寧なナデ調整が施され、外底部にヘラ切り痕が認められる。119・120は、ほぼ真下に向く断面方形の高台が付く。体部は斜上外方に直線的に立ち上がる。器形からみて杯に分類し得るものであるが、法量からここでは碗とした。121は真下に向く断面方形の高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。ロクロ成形であり、回転ナデ調整が施される。

黒色土器 (Fig. 27-122~124)

黒色土器は、碗が中心に出土している。122~124は内面黒色のA類である。122は真下に向く断面方形の高台が付く。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。123は体部中位でやや段を持ち、口縁部は外反する。内面に横方向及び斜め方向を基調とするヘラ磨きを施す。124はE-11グリッド (Pit48) から出土した。「ハ」の字形に開く断面方形の高台が付く。125~127は内外面黒色のB類である。125はやや球形を呈した呈部外面端部に「ハ」の字形に開く断面逆台形の低い高台が付く。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。内面には横方向を基調とするヘラ磨きが施される。体部下半は指頭圧痕が認められる。126は内湾して立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。内外面とも横方向を基調とする丁寧なヘラ磨きを密に施す。127は楠葉産である。「ハ」の字形に開く断面逆台形状の高台が付く。丸味を持つ底部から、内湾して立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。口唇部内面直下に1条の沈線が巡る。器壁は全体的に薄く、精選された胎土であり、内外面とも全体的に横方向を基調とするヘラ磨きが密に施される。

緑釉陶器 (Fig. 28-128~130)

皿及び碗が出土している。128~130は京都系の碗である。128は断面方形の高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がる。129は断面方形の削り出し高台が付く。釉は剥落が著しく、色調は不明である。胎土は硬質である。130は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。131・132は京都系の皿である。131の口縁端部は僅かに外反し、丸くおさめる。132の底部は削り出し高台である。釉の剥落が著しく色調は不明である。133は篠窯系の碗である。底部は削り出し輪高台であり、底部内面は蛇の目状に釉が残るが、釉の剥落が著しく、色調は明確でない。胎土は硬質である。134は京都系の皿である。断面方形の低い高台が付く。口縁端部は僅かに内傾し、端部は丸くおさめる。135は近江系の碗である。「ハ」の字形に開く断面逆三角形の高台が付く。濃緑色釉が施されるが、剥落が著しい。

灰釉陶器 (Fig. 28-136)

136は猿投窯産 (K-90) の碗である。断面三日月形の高台が付く。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。浸け掛け施釉により、体部内外面下部まで、オリープ灰色を呈した施釉が認められる。

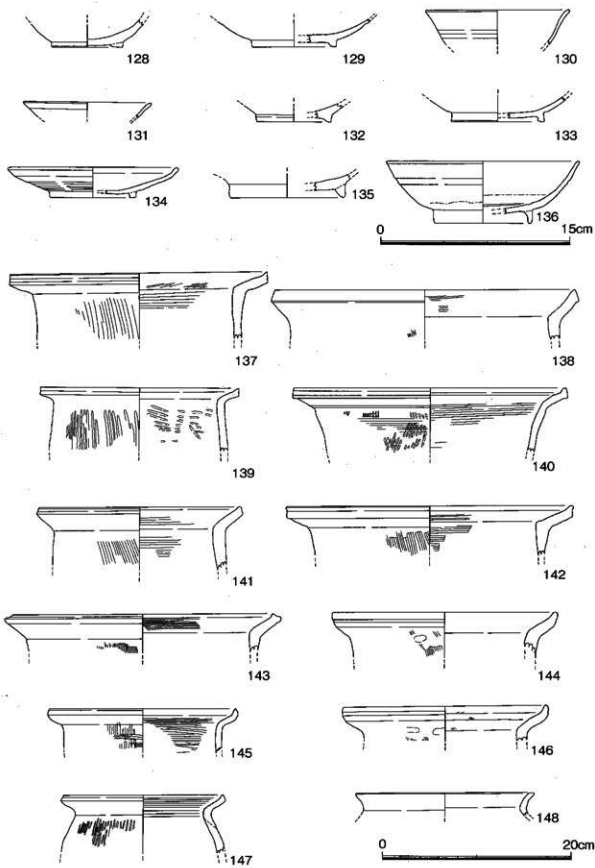


Fig. 28 包含層出土遺物 4 (綠釉陶器, 灰釉陶器, 土師器甕)

土師器甕 (Fig. 28-137-148)

土師器甕は、長胴型を呈したものが中心に出土している。胴部の形態により、大きく二つに分類し、長胴型の甕については口縁部の形態により以下に細分した。

A類：長胴型を呈した甕であり、胴部は筒状を呈し、真下に下がるタイプである。外面は縦方向、内面は横方向を基調とするハケ調整が施される。

A-I類：口縁部が「く」の字形に外反し、端部は面を成す。口径が26cm前後のもの(137)と口径が30cmを超えるもの(138)とがある。

A-II類：口縁部が「く」の字形に外反し、端部を上方につまみ上げる。口径が20cm前後のもの(139・141)と28~29cm代のもの(140・142・143)がある。

A-III類：口唇部は丸味を帯び、器壁はやや薄い。口径が19.5~23cm代を測る。(144~146)

B類：胴部が口縁直下から球形状に膨らむタイプである。(147・148)

137~146は、A類の甕である。137は口縁端部が真横を向き、外面に2条の凹線状の線が認められる。口縁部は内外面ともナデ調整が施され、胴部は木理の粗いハケ調整が施される。138は、137に比べ、口縁の外反の度合がやや上方向きである。口縁端部は平面を成す。139の口縁端部は真横を向き、外面に浅い凹線が認められる。胴部は内外面とも木理の粗いハケ調整を施す。140の口縁端部は真横を向き、さらに、端部を上方につまみ上げる。胴部外面は、叩き成形の後、木理の粗いハケによる横方向の調整が施される。胴部内面は、横方向のハケ調整を施す。141の口縁端部は浅い凹面を成し、端部を僅かに上方につまみ上げる。口縁部内面は横方向のハケ調整、外面はナデ調整を施す。胴部内外面とも木理の粗い原体によるハケ調整を施す。142の口縁端部は真横を向き、外面は凹線状を呈す。口縁部内面は横方向のハケ調整、外面はナデ調整を施す。胴部内外面とも木理の粗い原体によるハケ調整を施す。143はⅡ区第Ⅲ層(暗褐色シルト)の包含層からの出土である。口縁端部は内傾する浅い凹面を成し、端部は僅かに上方につまみ上げる。144は口縁部外面に1条の沈線が認められる。傾部外面接合部に指頭圧痕が認められる。145はⅡ区第Ⅲ層(包含層)からの出土である。内面は横方向、胴部外面は縦方向の後、横方向のハケ調整が施される。146の口縁端部は真横を向き、外面に1条の沈線が認められる。傾部外面接合部に指頭圧痕が認められる。147・148は、B類の甕である。147は「く」の字に外反し、口縁端部は内傾する面を成す。口縁部内面は粗い横方向のハケ、外面はナデ調整を施す。胴部外面は粗い縦方向のハケ、内面はナデ調整を施す。148の口縁端部は水平な面を成す。内外面とも丁寧な調整が施される。緻密な胎土であり、色調は黒灰褐色を呈する。搬入品と考えられる。

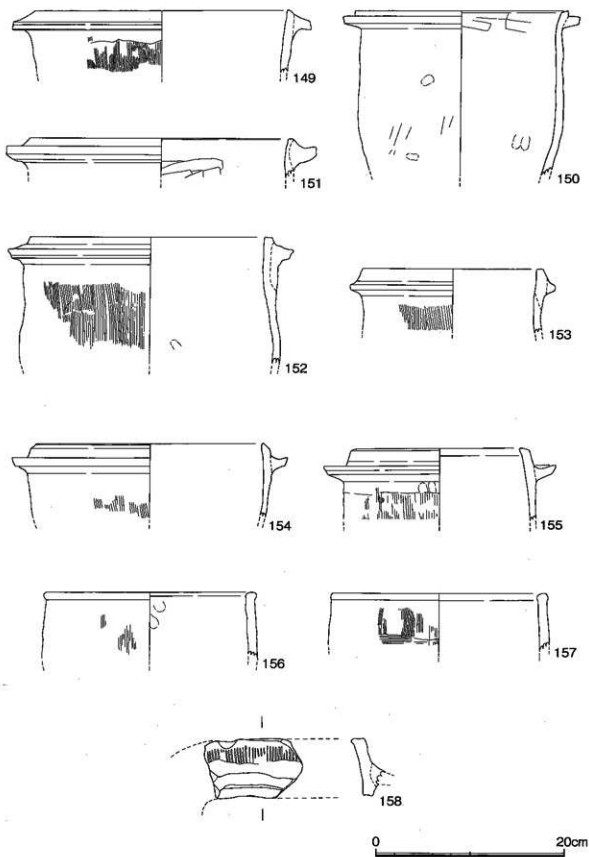


Fig. 29 包含層出土遺物5 (土師器羽釜・甕 (移動式))

土師器羽釜 (Fig. 29-149~158)

羽釜は摂津産が中心に出土している。149は摂津型 (C-II型) である。外面には垂れ気味に断面逆台形状の鈔が付く。鈔端部は僅かに凹む。胴部外面は縦方向のハケ調整が施され、鈔の取り付け部に粘土接合帯を認める。150は口縁端部外面に水平方向に伸びる鈔が付く。端部は面を成す。151~153は摂津型 (C-II型) である。151は口縁端部は面を成し、その外面直下に断面台形の鈔が付く。鈔端部は面を成す。口縁端部内面に横方向のヘラ削りが施され、鈔の取り付け部には粘土接合帯を認める。152の口縁端部は面を成し、外面直下に断面台形の鈔が付く。鈔端部は浅い凹面を成す。胴部は緩やかに下方に下がる。胴部外面に縦方向のハケ調整が施され、胴部内面には指頭圧痕が認められる。153の口縁端部は水平な面を成す。端部外面直下に断面台形の鈔が付き、鈔端部は面を成す。胴部外面は縦位のハケ調整、内面はナデ調整を施す。154は摂津型 (C-I型) である。胴部は僅かに内湾して口縁部に至り、端部は内傾する。口縁部からやや下がったところに断面方形の鈔が付く。鈔端部は斜位に切り落とし、平面を成す。胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。155はⅡ区第Ⅲ層 (包含層) 出土である。他の羽釜に比べ、鈔が口縁部から下がった所に付く。口縁端部は水平な面を成し、鈔は上向きに付けられ、上端部は凹む。胴部外面は縦位のハケ調整が施され、鈔の取り付け部には粘土接合帯を認める。156・157は鈔部分が欠損しているが羽釜であると考えられる。胴部はほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は僅かに外方に肥厚する。156は胴部外面に縦位のハケ調整、内面に指頭圧痕が認められる。157は口縁部外面に縦位のハケ調整、やや下がった所に横位の粗いハケ調整が認められる。158は移動式の竈であると思われる。鈔は欠損しておりその形状は不明であるが、口縁部外面は縦位の粗いハケ調整が施される。

土鍾 (Fig. 30-159~161)

159~161は紡錘形の土鍾である。160は黒色を呈する。161はPit42から出土している。ほぼ円筒形を呈する。両端部は一部欠損している。162は大型の土鍾で両側面に溝状の抉りが入る。

須恵器 (Fig. 30-163~177)

須恵器は、供膳具である杯、蓋、貯蔵具である甕、壺が中心に出土している。163~166は杯である。163は平底を呈する。斜上外方に直線的に立ち上がる。マキアゲ、ミズビキ成形である。164は円整状高台から内湾気味に立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りである。165は「ハ」の字に開く高い高台が付く。166は断面逆台形状の低い高台が付く。体部は斜上外方に直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。167~169は壺である。167は擬宝珠形のつまみが付く。天井部は僅かに凹む。168は扁平なつまみが付く。天井部は僅かに凹む。169は平坦な頂部から下方内側に屈曲し、口縁部に至る。口唇部は面を成す。外面に灰オリープ色の自然釉がかかる。170~172は壺である。170は「ハ」の字に開く断面方形の高台が付く。体部は上方にはほぼ直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整が施され、体部内面の一部に指頭圧痕が認められる。171・172は底径が小さいが壺の底部片と思われる。断面方形を呈した低い高台が付く。173~176は甕である。173・174の口縁部は「く」の字に外反し、端部は僅かに上下に拡張がみられ面を成す。

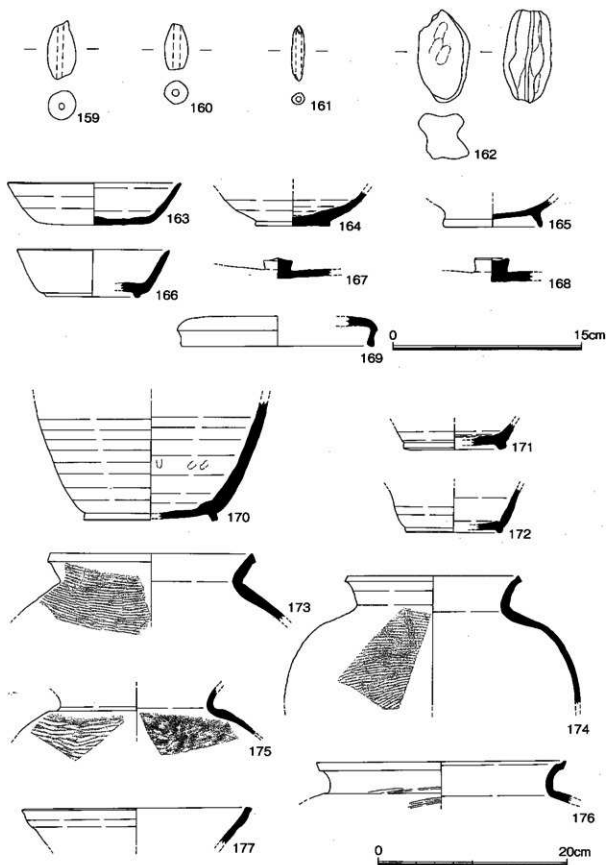


Fig. 30 包含層出土遺物 6 (土鉢、須恵器杯・蓋・壺・甕・鉢)

胴部外面は横方向の平行叩き、内面はナデ調整を施す。175の口縁部は欠損するが、胴部外面は横方向の平行叩き、内面は充て具の痕が認められる。176は直立する頸部から口縁部は外反する。口縁端部は上方に拡張し、面を成す。頸部外面の一部に斜位の叩きが認められる。177は鉢である。斜上外方に直線的に立ち上がり、端部は面を成す。ミズビキ成形である。

(2) I 区南

I 区南では、土師器、瓦器、須恵器、同安窯系青磁、白磁、瓦、鉄製品、凹み石等が出土した。第Ⅲ層（灰褐色粘質土）である包含層からの出土が中心であるが、特にI 区南調査区の北部グリッドでまとまった出土がみられた。土師器では、供膳具である小皿・杯・碗が中心に出土しており、小皿・杯については底部切り離しが全て回転糸切りによるものである。碗は、円盤状高台のものと同輪高台のものがみられる。瓦器は碗と皿が中心に出土している。須恵器については貯蔵具である甕、調理具である鉢がまとめて出土している。同安窯系青磁はI-1b類（森田編年による）の碗が出土しており、白磁についてはⅡ・Ⅳ・Ⅴ類（森田編年）の碗が中心に出土している。瓦は、全て平瓦の破片であり全容は不明であるが、瓦内面に単位の細かい布目痕が認められる。

土師器

小皿 (Fig. 178~184)

178~184は小皿である。全てロクロ成形で、内外面ともナデ調整を施し、底部切り離しは回転糸切りである。179・180・182~184は底部内面にロクロ目が認められる。178は器高が1.8cmを測り、器形が小杯に分類し得るタイプ（B-Ⅲb類）である。他に比べ底部がやや分厚い。179・180は口縁部が外反するタイプである。180の口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。181・182は口縁部にかけて直線的に立ち上がるタイプである。183は器形が小杯に分類し得るタイプ（B-Ⅲa）である。体部中位からやや外反する。184は平底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。179はP115、183はP85、184はP123からの出土である。

杯 (Fig. 185~191)

185~191は杯である。全てロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切りである。内面にナデ調整が施される185~187と、内外面ともナデ調整が施されている188と、内外面とも回転ナデによりロクロ痕が認められる189がある。185は器形からみて碗に分類し得るがここでは杯で分類した。円盤状高台から斜上外方にやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。186は平底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反し、口縁端部は肥厚する。186はSD8からの出土である。187は平底から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。187はSD11のP164からの出土である。188はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。189は平底から斜上外方に直線的に立ち上がる。底部内面にロクロ目が残る。190・191は円盤状高台である。体部から上方が欠損しており、形態が不明であるがここでは杯で分類した。190はP115から出土している。内底部が凹む。191は柱状を呈した高台である。底部内面はナデ調整である。

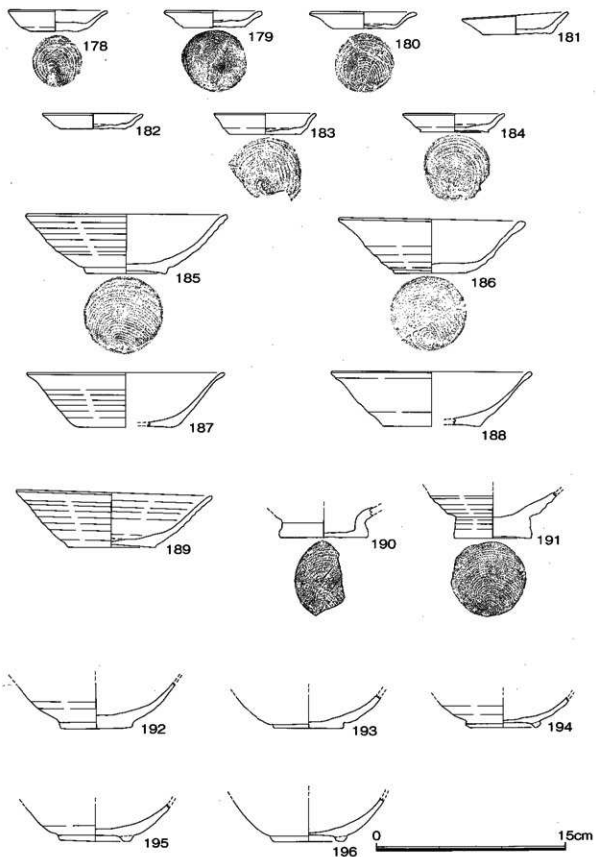


Fig. 31 包含層出土遺物7 (土師器皿・杯・碗)

碗 (Fig. 192~196)

192~196は碗である。192~194はS D14出土である。192・193は円盤状高台であり、底部外面に回転糸切り痕が残る。193は体部外面に粘土紐マキアゲの接合部が認められる。194~196は輪高台の碗であり、194は「ハ」の字状に開く断面方形の高台が付く。195はS D16出土である。真下を向く断面逆台形の高台が付く。196はS D11出土であり、真下を向く断面半円形の高台が付く。

瓦器 (Fig. 197・198)

197・198は碗である。197は体部中位でやや段を持ち、斜上外方に立ち上がる。口縁端部は薄く、口唇部は丸くおさめる。198の体部は内湾して立ち上がる。口縁端部は細り、口唇部は丸くおさめる。体部外面下半に指頭圧痕を認める。199は皿である。丸底気味の底部から斜上外方に立ち上がる。口縁部外面は強い横ナデにより器壁が薄くなり、やや外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面下半部に指頭圧痕を認める。200・201は碗である。200はP115、201はP137出土である。断面逆三角形の低い高台が付く。

緑釉陶器 (Fig. 202)

202は皿である。底部は円盤状高台であるが、摩耗が著しく、切り難しは不明である。軟質の焼きで淡緑色の釉が一部底部外面まで施釉されているが、全体的に釉の剥落が著しい。京都産である。

土鍾 (Fig. 203)

203は土鍾である。ほぼ円筒形を呈し、須恵器に近い焼成である。全長4.3cm、全幅1.7cm、孔径0.5cmを測り、重量は12.5gである。

土師器甕 (Fig. 204)

204はS D14出土である。胴部は僅かに内湾気味に下がり、長胴型を呈するものと思われる。口縁部は外傾し、端部は面を成し、僅かに凹む。口縁部外面は横方向のハケ調整、他はナデ調整を施す。205の胴部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の字形に外傾する。内面は横方向を基調とするハケ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整が施される。

須恵器

須恵器は甕、鉢といった貯蔵具、調理具が中心に出土している。206は小型の杯であり、円盤状高台から斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は外反し、口唇部は丸くおさめる。ロクロミズビキ成形であり、内面はナデ調整が施される。底部外面は回転糸切り痕が認められる。207・208は甕である。207は口縁部は強い横ナデにより大きく外反し、端部は水平平面を成す。胴部外面は横方向の平行叩き、内面はヘラ状工具によるナデ調整を施す。208は内傾する胴部から頸部は直立し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は面を成し、やや上方に拡張する。胴部外面は横方向の平行叩き、内面はあて具の痕跡か凹凸が目立つ。頸部から上は、内外面ともナデ調整が施される。

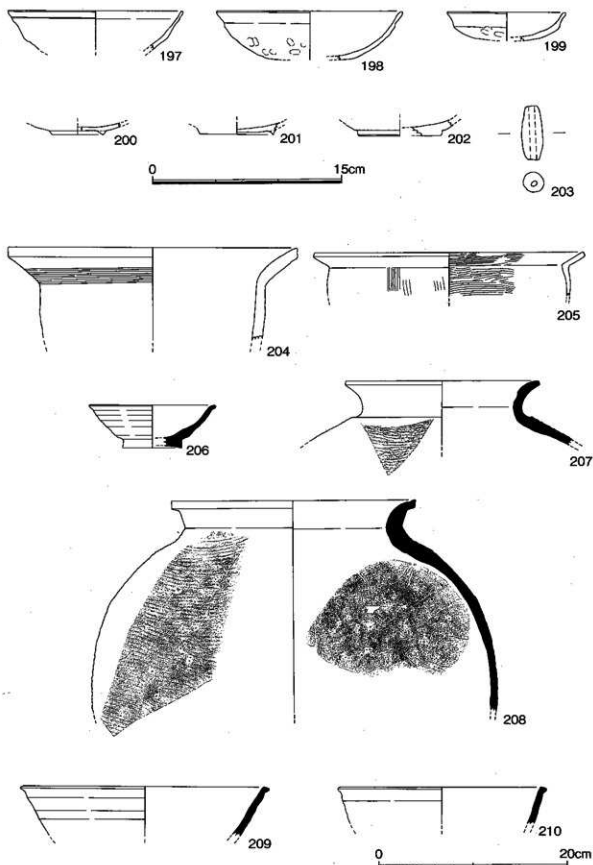


Fig. 32 包含層出土遺物 8 (瓦器碗・皿, 綠釉陶器皿, 土鉢, 土師器甕・鍋, 須惠器杯・甕・鉢)

207・208とも胎土が粗雑であり、0.5~1.3cm大の角礫が含まれている。胎土の成分であると思われる鉄分が融解し、内外面に点々と癒着している。内面の色調は明褐色を呈する。209~212は鉢である。すべてロクロミズビキ成形であり、ナデ調整が施される。209~211の口縁端部は短く外折し、水平な面を成す。212は平底を呈する底部から斜上外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は内傾する面を成す。何れも色調は灰褐色を呈し、硬質で焼成は良好である。210はP117からの出土である。

青磁

213・214は同安窯系の青磁碗である。内外面に単位の細かい櫛描き条線が施される。214は断面逆台形の厚い高台を有す。体部は内湾気味に立ち上がり、内底見込みと体部との境に1条の沈線が施される。双方ともI-1b類(森田分類による)に属する。

青白磁

215はSD14からの出土である。側面菊座状の平型合子の蓋である。蓋天井部(甲)に型押し文の浮き出しが施される。

白磁

216~232は全て白磁碗である。216~223は口縁部が玉縁になるものでIV類(森田分類による)に属する。216~218は口縁部に薄く肥厚する玉縁を持つ。218の胎土は灰白色を呈し、釉色は、やや黄色味を帯びる。軸は全体的に薄い。220~223は口縁部に厚く肥厚する玉縁を持つ。胎土は灰白色を呈し、釉色は灰色を帯びた乳白色を呈する。221の体部外面下半は施釉されていない。222は口縁端部内面がやや凹む。224~229はII・IV・V類(森田分類による)に属する碗の底部片である。224は高台外面を直に、内面を斜めに削り出したもので225~227に比べやや高台が高い。体部外面下半は施釉されない。225の高台はやや幅広で、削り出しは224に比べ浅い。内面見込みに沈線状の浅い段を持つ。226の底部は分厚く、高台の削り出しも僅かである。胎土は灰白色を呈し、釉色はやや黄色味を帯びる。227は幅広の高台であり、外底部の削り出しは僅かである。高台外面から体部下半はノミ状工具により削り取った痕が認められる。内面見込みに沈線状の浅い段を持つ。228は断面長方形の直立する高い高台を持つ。軸は内面については全面施釉、外面は高台外面に釉が垂れ、畳付から外底部にかけては露胎している。229は断面三角形を呈する高台を持つ。軸は内面については全面施釉、外面は高台外面まで釉が垂れる。内面見込みに沈線状の浅い段を有す。230・231は体部内面上位に1条の浅い沈線が認められる。口縁端部は直立し、尖り気味に仕上げる。232は口縁端部が僅かに外反する。釉は黄色味を帯びた灰色を呈し、全体的に薄く施釉されている。

瓦

瓦は全て破片であり、全容が判り得るものはなかった。平瓦片が中心に出土している。233~236は平瓦片であり、内面に単位の細かい布目痕が認められる。焼成は悪く、胎土も粗雑である。いずれも須恵質である。237はSD8出土の軒平瓦である。右巻の三つ巴文が認められる。巴頭部は尖

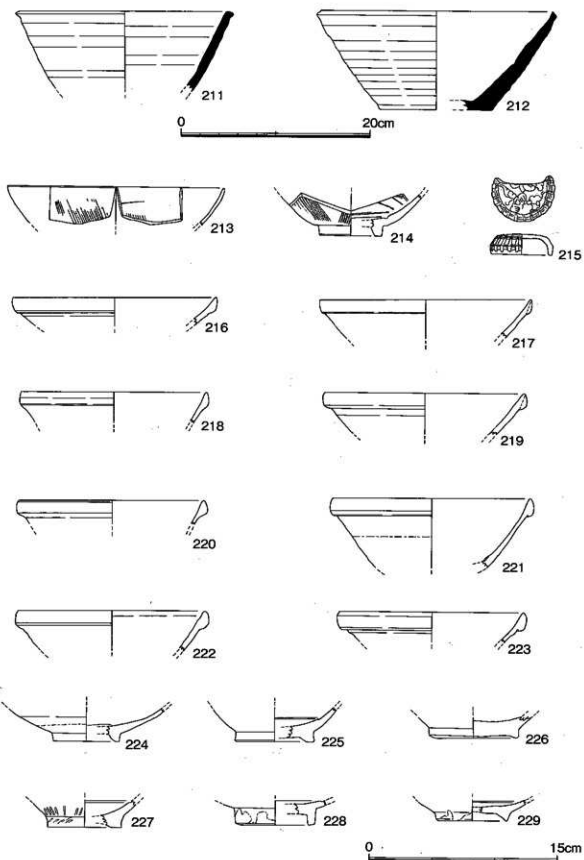


Fig. 33 包含層出土遺物9 (須恵器鉢, 青磁, 青白磁, 白磁)

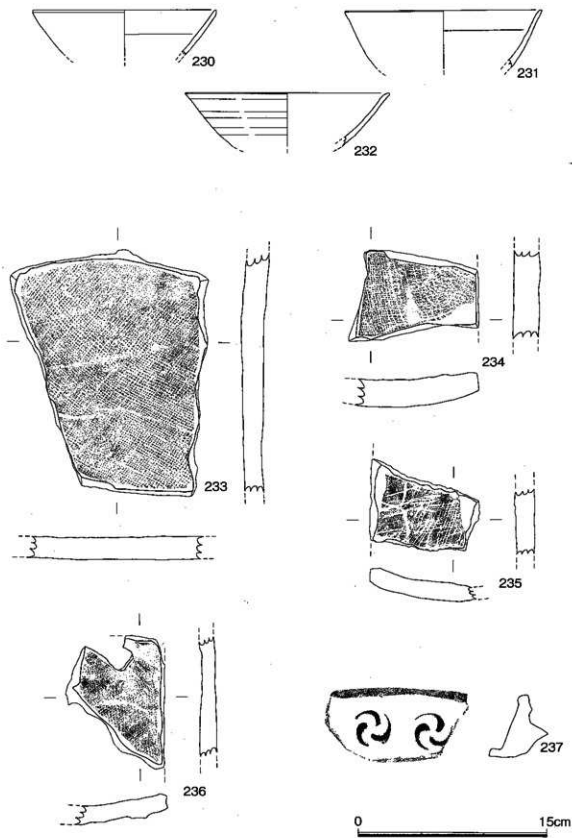


Fig. 34 包含層出土遺物10 (白磁, 瓦)

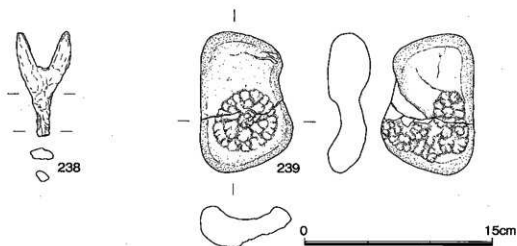


Fig. 35 包含層出土遺物11 (鉄製品, 石器)

り気味であり、尾は短い。文様断面は丸味を持つ。外縁幅0.8cm, 外縁高1.0cm, 瓦当厚1.8cmを測る。

鉄製品

238は雁股鐵である。基部は欠損している。基部の断面は扁平である。残長8.4cm, 全幅4.4cm, 重量27.3gを測る。

敲石

239は敲石である。両面の端部に敲打による凹みがみられる。石質は砂岩であり、表面はなめらかである。全長11.3cm, 全幅7.3cm, 全厚3.4cm, 重量390gを測る。

第V章 まとめ

今回の調査では、物部川周辺に展開する古代末～中世前期にかけての遺跡の立地や展開を知る上で貴重な成果を得る事が出来た。深淵北遺跡は、物部川によって形成された自然堤防上に立地しており、今次調査区の北と南では時期的な差が認められ、古代末～中世前期にかけての変遷を見る事ができる。ここでは、I区北と南の各調査区で検出された遺構と、特徴的な出土遺物について概観し、物部川を中心とした高知平野の古代末から中世前期にかけての土器様相についてまとめてみたい。

1. I区北の遺構と遺物

I区北では、ビット65個、土抗6基、溝4条を検出した。また、遺構検出面上の包含層から土器の杯、皿の出土が見られる。遺構埋土は、暗褐色粘質土で包含層と同じ埋土であり、SK1、Pit60では比較的遺物がまると出て出土が見られた。SK1は、平面プラン隅丸長方形であり土器の杯・皿・甕、黒色土器碗が出土しているが、供膳具の形態から9世紀後半代と考えられる。また、Pit60は平面プラン楕円形を呈し、規模が長軸1.8mと大きく土抗として捉えることができる。このPit60からはSK1と同形態、同法量の土器の杯や、黒色土器碗が出土しており、SK1と同時期の遺構として考えられる。遺構の長軸方向はN-18°-W前後を示し、同じ方向性を持つ。また、隣接するSD2～4及び7についても平行、垂直方向を示し、埋土も同じ暗褐色粘質土及びシルトであることから同時期性が考えられる。I区北の包含層からは多量の土器の供膳具の出土が見られるが、G9グリッドの集中遺物を見れば、包含層Ⅲ層は上層と下層で様相がやや異なる。土器供膳具について見れば上層では56・58のような碗、杯については52・53のように器高の高い杯が見られ、下層では器高が3内外を測る杯が多く出土している。先述のSK1・Pit60から出土した杯と同タイプのものである。このタイプの杯と併せて出土した黒色土器を見れば66・67の内面のみ黒色処理された(A類)であり搬入品であり平城京SD650併行と考えられ、この事からI区北で出土した土器供膳具及び検出された遺構は9世紀後半頃の帰属時期が想定できる。また、包含層がG9グリッドの地点のように部分的に厚く堆積が見られ、上層部からの出土遺物を見れば土器では円盤状高台碗、輪高台碗、その他黒色土器碗(B類)、緑釉陶器などが出土している。この内、127の黒色土器碗は内外面黒色処理された楠葉産(B類)のものであり、緑釉陶器については京都系のものであるが、中に近江系統(135)や、篠森系の碗も見られる。また、猿投窯産の灰釉陶器碗(135)も見られ、これら搬入品の帰属時期を見れば、緑釉陶器から9世紀末～10世紀代が考えられ、黒色土器碗(B類)、灰釉陶器碗から11世紀初頭～11世紀前半期の帰属時期が考えられる。在地産の土器供膳具では器高の高い杯や円盤状高台碗が見られるが、杯については全て回転釜切りであるが、下層部で認められた杯に加え、器高の高い杯が散見できる。また、碗は輪高台のものと同円盤状を呈したベタ高台のものが見られるが、この内、後者は回転釜切りのものが見られる。県内の遺跡に目を向ければ、同様の遺物様相が見られる遺跡は土佐山田町に所在するひびのきサウジ遺跡のSE1

資料が挙げられる。この遺構からは一括廃棄の状態で、土師器供膳具、黒色土器、土師器甕などが出土しており、出土した遺物の供伴関係から10世紀後半代の時期が想定されている。ひびのきサウジ遺跡から出土した土師器供膳具と、I区北から出土したものを比較すると形態・法量ともに類似しており、同時期として捉えることが出来る。また、ひびのきサウジ遺跡では円盤状高台碗は須恵器と土師器のものが同等数の割合を示すのに対し、深淵北遺跡では須恵器碗は僅少である。この円盤状高台碗の形態については播磨地方の須恵器窯で供給されていたものと同形態のものであり、さらに、同一形態の土師器碗を在地で生産しており、模倣系土師器碗として須恵器碗と同様に当該地域においてもある一定の需要があったものと推測される。

以上、I区北の遺物を概観してみたが帰属時期を整理すると、9世紀後半～末葉にかけてと、10世紀前半にかけての時期にピークが認められ、さらに、10世紀後半から11世紀前半に次のピークがある。後述するI区南の様相と後で比較してみたい。

2. I区南の遺構と遺物

I区北の南部に位置し、調査区中央部を流露堆積によって寸断される。地山を構成するのは黄色から黄灰色を呈したシルト～粘土質層であり、I区北と同じように形成された自然堤防的性格を示す。包含層についてはI区北で検出されたⅢ層とは異なる灰褐色粘質土の堆積が認められ、I区北と時期の異なる遺物が出土した。I区南では、包含層直下で掘立柱建物跡2棟、ピット88個、溝10条を検出したが、調査区北東部に遺構が集中する。北東部で検出されたSB1・2及びSD12・16は建物の棟方向とはほぼ併行しており同時期が考えられる。掘立柱建物の周りを溝が巡るものと考えられるが連続せずにL字状の溝を組み合わせるように構築されている。SB1は東西棟建物であり、1間×3間のプランを検出しているが、梁間が1間以上になる可能性も考えられる。建物の棟方向はN-72°-Eを測りSD12と一致しており、SD12・16に囲まれた建物になる。この溝にはほぼ平行して南部でSD13を検出しているが東端部でやや南に曲がるようなプランを呈する。東端部は調査区外になるため未検出であるが、SD12とはほぼ同じ規模・形態を示すものと思われる。また、SD13の南部では掘立柱建物のプランは検出されなかったがピットを何個か検出しており、SD13に囲まれるような形で建物が存在していた可能性が考えられる。SD12・13ともに出土遺物から11世紀後半～12世紀代が想定されるが、当該期の遺構は県内には類例が乏しく特に建物等の遺構プランについては未だ不明な点が多い。13世紀代になると溝で囲まれた屋敷などが出現してくるが、その前段階に位置づけられる遺構プランであると考えられる。

次にI区南で検出した遺構から出土した遺物を見てみたい。冒頭でも触れたがこれらの遺構検出面上にはI区北では検出されなかった灰褐色粘質土の包含層があり、土師器、瓦器、須恵器、同安窯系青磁、白磁、瓦、鉄製品、凹み石等の出土が見られた。土師器は小皿、杯が主体であり、底部切り離しは全て回転系切りである。須恵器は貯蔵具の甕、調理具では鉢が主体に出土している。甕については胴部外面に平行叩き、自然釉が認められ、胎土中の成分と思われる鉄分が融解し内外面に点々と付着している。後述する佐古亀山窯の出土表採資料の甕と同一のものと考えられる。これらの須恵器を見れば、甕の外面に残る平行叩き痕は東播磨の甕の特徴に非常に類似しており、調理

具である鉢も形態・調整手法が共通していることから播磨地域からの技術手法の伝播を窺わせる資料であると言える。貿易陶磁器については、同安窯系青磁（I-1b類；森田分類）、白磁ではIV・V類の碗が主体で出土している。これら貿易陶磁器の年代観は11世紀後半～12世紀代にかけてのものである。

以上、I区南の包含層から出土した遺物を概観したが、中心となる時期は11世紀後半から12世紀代にかけてであり、検出された遺構の時期も概ね当該期に比定できる。前述のSD12・13及び、これらの溝と併伴するSB1・2から出土した遺物の中で土師器供膳具の特徴を挙げると、皿は法量が増え、縮小し、「小皿」と呼べる器形になり、杯は前段階に存在する円盤状高台碗の底部の形骸化が更に進み、体部が直線的になり「杯」と呼べる器形への変化がそれぞれ挙げられる。I区北で出土した円盤状高台碗は播磨模倣として捉えることができるが、形態を模倣したものであり、粘土版を貼付けた底部など成形・手法は在地特有のものである。10世紀後半以降、播磨系の技術も一部、伝播していたものと思われ、これらの影響は当該地域においては12世紀代まで在地生産の中で変容しながら続く。12世紀代になると、SD12・13資料に見られるように円盤状高台の形骸化が進み、新しいタイプの杯が主流を占める。また、前述の平行叩きの甕も東播磨の特徴を兼ね備えており、深湖北遺跡周辺に立地する佐古亀山窯と何らかの関係があるものと思われる。

3. 結び 一深湖北遺跡の調査成果から見た高知平野の様相一

以上、I区北と南で検出された遺構と、特徴的な遺物を概観してみたが、深湖北遺跡は9世紀末から12世紀代と連続し続く遺跡である事が判った。遺跡の立地が物部川の自然堤防であることからI区北から南への移行期が出土遺物から11C後半頃に想定でき、調査区中央部の流路の影響が考えられる。検出された遺構は、規模・プランともに明確でないが、各期の出土遺物の内容から郡衙関連の性格が考えられ、遺跡の立地からみて古物部川河口付近には「津」的性格を持った遺跡が存在していた可能性がある。深湖北遺跡の周辺には野市町佐古亀山窯跡があり、表探資料と同じ調整手法、胎土の甕が今回の調査で出土している。この甕は前述したが、外面に平行タタキが残り、内面は円礫のような丸みのある当具痕が認められ、頸部から口縁部は回転ナデ調整が施され口縁端部は面を成し、形態的には東播磨の甕に極めて類似する。佐古亀山窯は瓦窯としても知られ、平安時代後期、京都へも瓦を供給していた窯跡である。窯跡の表探資料の多くは瓦であるが、その中に東播磨系瓦の特徴的な手法「包み込み技法」を使った軒平瓦がみられる。これらのことから、播磨系須恵器碗の衰退後も東播磨系の技術が導入され、在地須恵器窯においてこれらの製品が生産されていたことが明らかになってきた。この他、同町内に所在する白岩窯跡でもこの時期に須恵器甕が生産されていたとされているが発掘調査等、精査が行われておらず不明な点が多いため今後の調査が期待される。このように、在地の須恵器窯の需要と供給のあり方がどのように展開していたのか、また、他地域との関わりを知る上においては非常に貴重な成果を得ることができた。

その他の出土遺物に目を向けると、在地供膳具の変遷と、碗から杯に変化する什器の変遷を見ることができる。中でも今回出土した播磨系須恵器碗については、高知平野に所在する古代末の遺跡から頻繁に出土しており、当該期の主な遺跡を挙げると土佐山田町に所在するひびのきサウジ遺

跡のSE1, 南国市に所在する土佐国衙跡SX11, 同じ南国市の田村遺跡Loc.14SK31の資料などがある。これらの遺跡から出土した碗の形態を比較すると体部の内湾, 口縁部の外反の度合いなどに相違点が見られる。また, 播磨系須恵器碗を模倣した土師器碗も制作されており, 高知県では10世紀半ば以降, 11世紀前半にかけて播磨系須恵器碗の搬入及び模倣が展開する時期として捉えることができる。この時期に什器の主体が杯から碗に変容し, 土器組成も碗・杯・小皿に集約され南四国における中世的土器様式の成立期として捉えることができる。その後, 播磨系模倣碗は須恵器については減少し, 土師器碗については円盤状を呈した高台の形骸化が進みベタ高台になる。前述したI区南のSD12・13資料の段階であるが, 同様の様相を呈する遺跡を周辺地域に求めると曾我遺跡SK5, 高柳遺跡SK1の資料が挙げられる。円盤状高台碗の衰退とともに貼付輪高台の碗や底部回転糸切りの杯が出現してくるが, この段階の杯は体部が直線的になり, その後の在地の土師器杯の製作手法に展開してゆく新しいタイプの杯といえる。これらの在地の土師器供膳具と供伴する陶磁器類は白磁のIV類などが見られる事から相対的に見てこれらの変容の段階を11世紀後半から12世紀代として捉えることができる。以後, 12世紀前半代は資料的に少なくなるが, 12世紀後半頃, 楠葉型瓦器碗や中国陶磁器が搬入されるようになり, 13世紀代に入ると在地の土師器供膳具の組成は杯・皿・小皿で構成されるようになり, 12世紀代に普及した土師器碗は陶磁器碗や瓦器碗に淘汰されてゆく。

次に深湖北遺跡の立地する物部川流域及び高知平野の古代末から中世前期の遺跡についての関わりを見てみたい。深湖北遺跡は物部川左岸, 現香美郡野市町に立地するが, この地域において今までの発掘調査で確認されている古代の遺跡としては深淵遺跡・曾我遺跡が挙げられる。曾我遺跡は深湖北遺跡の東側にあたり, 台地状を呈する古期扇状地上を流れる香宗川流域に位置する。内容については第II章の歴史的環境で述べたが宗我郷の「郷家」あるいは郡衙クラスの役所の存在が推定されている。物部川流域で見れば当遺跡の南方約500mに位置する深淵遺跡があるが, 鈍尾・二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・円面硯・風字硯等が出土しており, 8世紀～9世紀前半にかけての官衙関連の遺跡として確認されている。このように, 物部川や香宗川に面した場所に古代の官衙関連遺跡の立地が見られる事から, 各河川流域には連続と古代の遺跡が展開されていたものと思われる。また, 川に面した立地から「郡津」の性格も想定され, 中央官衙との交易の場として機能していたものと考えられる。今回の深湖北遺跡の調査では9世紀後半代から遺跡が展開している事が明らかとなり, 深淵遺跡が立地する物部川河口付近からやや北上した地点に拠点が移動した可能性が考えられる。また, 対岸では田村遺跡があり, 物部川の形成する安定した自然堤防上に古代の官衙関連施設もしくは郡衙に相当する施設が展開しているものと考えられ, 香長平野と条理を見てゆく上でも重要である。

このように, 古代の官衙関連遺跡に重複, もしくは隣接するような地点に古代末から中世前期にかけての遺跡が展開しているものと思われ, 特に河川流域では河口付近, 川に面した箇所立地し, 物資流通を目的とした遺跡の性格に変化してゆくものと思われる。今回の深湖北遺跡も水運を中心とした「郡津」的性格の遺跡である可能性があり, 今後, 周辺地域の遺跡から出土した資料との再検討を行い, 土佐の古代末から中世前期にかけての様相を見ていきたい。

法 量 表 1

測定番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (番)		調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高					
1	土師器	杯 A-Ia②	12.7	3.55	7.1		透黄橙	7.5YR 8/6	I区北	H-11 (SK1)	
2	〃	杯	13.0	3.3	9.0		橙 透黄橙	7.5YR 7/6 7.5YR 8/6	〃	〃	
3	〃	皿	(11.8)	1.6	8.8		橙	2.5YR 6/8 5YR 7/8	〃	(11.8)	
4	〃	皿 A-IIc	15.4	2.15	8.4		橙	5YR 6/6	〃	〃	
5	黑色土器	椀 A	18.4	(4.5)	-		にぶい黄橙 雑灰	10YR 7/4 N 3/0	〃	〃	
6	土師器	壺 B	15.4	(15.4)	-	銅径 14.5	にぶい黄橙	10YR 7/3	〃	〃	
7	〃	杯 A-I	13.6	3.3	6.9		透黄橙	7.5YR 8/4	〃	G-11 (P60)	
8	〃	杯 A-Ia③	13.9	3.1	8.9		橙	5YR 7/8 2.5YR 6/8	〃	〃	
9	須恵器	杯 C	-	(1.5)	7.0	0.5	灰白	5Y 7/1 5Y 8/1	〃	〃	
10	黑色土器	椀 A	-	(1.25)	8.5	0.6	橙 雑灰	7.5YR 7/6 N 3/0	〃	〃	
11	土師器	皿	11.8	1.6	7.0		透黄橙	10YR 8/3	〃	〃	
12	〃	小皿 B-IIa	8.1	1.6	4.5		灰白	10YR 8/2	I区南	I-20 (SD12)	
13	〃	小皿 B-IIb	7.0	(1.0)	4.7		にぶい橙	2.5YR 6/4	〃	〃	
14	〃	小皿 B-IIa	7.6	1.75	4.55		透黄橙	7.5YR 8/4 10YR 8/4	〃	〃	
15	〃	杯	-	(2.5)	6.6	0.15	〃	10YR 8/3	〃	〃	
16	〃	杯 B-IIa	-	(2.55)	6.3	1.0	〃	7.5YR 8/3 10YR 8/3	〃	〃	
17	〃	杯	15.5	4.8	6.7	0.3	〃	10YR 8/4 7.5YR 7/6	〃	〃	
18	瓦器	椀	14.3	5.25	6.3	0.4	灰	N 4/0	〃	〃	
19	須恵器	壺 B-I	22.6	(7.6)	-		灰白	N 7/0	〃	〃	
20	〃	壺	-	-	-		灰白 灰黄褐	N 7/0 10YR 6/2	〃	〃	
22	土師器	小皿 B-IIa	8.3	1.5	4.2		透黄橙	10YR 8/3	〃	I-20 (SD13)	
23	〃	皿	8.2	1.55	4.7		〃	10YR 8/4	〃	〃	
24	〃	杯	15.5	(3.1)	-	0.1	〃	10YR 8/3	〃	〃	
25	〃	〃	-	(2.7)	6.2		〃	10YR 8/4 10YR 8/2	〃	〃	
26	〃	杯	-	(1.85)	7.0		灰白 透黄橙 にぶい橙	10YR 8/3 7.5YR 7/4	〃	〃	
27	〃	杯 A-IIa	14.7	3.98	6.8		にぶい黄橙 透黄橙	10YR 7/4 10YR 8/3	〃	〃	
28	〃	杯	14.6	5.3	6.2	0.3	橙	7.5YR 7/6	〃	〃	
29	須恵器	杯 B	-	(2.2)	6.5	0.3	透黄橙	10YR 8/4	〃	〃	
30	白磁	碗 IV	17.0	(2.9)	-		灰黄 灰白	2.5Y 7/2 2.5Y 8/1	〃	〃	
31	土師器	壺 B	9.6	(3.5)	-	銅径 9.5	にぶい黄橙	5YR 6/3 10YR 7/3	〃	〃	
32	須恵器	杯 B	15.5	3.9	7.5		にぶい黄橙 灰白	10YR 7/2 5Y 7/1	〃	〃	
33	〃	壺	21.6	(7.1)	-		灰黄褐	10YR 5/2	〃	〃	
34	〃	〃	-	(4.55)	15.2		灰白 にぶい橙	7.5Y 7/1 7.5YR 5/3	〃	〃	
35	〃	壺	-	-	-	-	灰 にぶい橙	N 4/0 7.5YR 5/3	〃	〃	
36	〃	〃	-	-	-	-	雑灰	10YR 5/1	〃	〃	

法 量 表 2

標記 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 形 (断)		調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高		内径	高さ		
37	須臾器	甕	—	—	—	—	灰白	N 7/0 N 6/0	I 区南	I-20 (SD13)	
38	土師器	杯 A-IIb	14.8	4.9	7.7		透黄橙	10YR 8/3	◇	I-19 (SB1 P135)	
39	◇	杯 A-IIa	14.9	4.0	7.3		橙	5YR 7/8	◇	I-19 (SB1 P141)	
40	◇	杯	14.3	4.4	6.95	0.1 (台径6.35)	透黄橙	10YR 8/3	◇	G-22 (P82)	
41	◇	◇	14.2	4.75	6.9		◇	7.5YR 8/4	◇	◇	
42	瓦器	椀	14.8	4.2	5.5	0.38	灰	7.5Y 4/1	◇	◇	
44	土師器	小皿 B-IIb	7.8	1.6	4.2		透黄橙	10YR 8/4	◇	I-21 (P88)	
45	◇	B-IIb	7.8	1.5	5.1		橙	5YR 7/6	◇	◇	
46	◇	皿 A-IIb	14.5	1.65	11.6		透黄橙	7.5YR 8/4	I 区北	G-9	
47	◇	A-IIc	13.35	2.3	9.8		橙	5YR 7/6		◇	
48	◇	A-II	13.0	1.3	8.4		◇	◇	◇	◇	
49	◇	◇	12.7	1.75	8.2		透黄橙 黄灰	10YR 8/4 10YR 8/6	◇	◇	
50	◇	杯 A'-I	9.4	3.7	6.4		◇	7.5YR 8/8	◇	◇	
51	◇	杯	14.8	4.4	7.4		にぶい黄橙	10YR 7/3	◇	◇	
52	◇	A-Ib③	13.9	5.1	7.4		透黄橙 黄灰	10YR 8/3 2.5Y 6/1	◇	◇	
53	◇	◇	13.4	4.95	6.8		にぶい橙 黄灰	7.5YR 7/4 N 31	◇	◇	
54	◇	B-Ia	12.0	4.7	6.6		透黄橙	7.5YR 8/6 7.5YR 7/6	◇	◇	
55	◇	B-Ib	12.8	4.8	8.4		橙	5YR 7/6	◇	◇	
56	◇	B-Ic	14.7	5.4	7.2		透黄橙	10YR 8/3	◇	◇	
57	◇	杯	11.8	4.0	8.6		◇	7.5YR 8/4 10YR 7/1	◇	◇	
58	◇	椀 C	—	(3.15)	9.5	0.9	黄橙	7.5YR 8/8 5YR 7/8	◇	◇	
59	◇	皿 A-IIc	13.45	1.88	9.5		透黄橙	7.5YR 8/4	◇	◇	
60	◇	A-II	13.2	2.3	9.3		橙	5YR 7/6	◇	◇	
61	◇	杯 A-Ia②	14.0	3.45	9.0		透黄橙	7.5YR 8/6 7.5YR 8/4	◇	◇	
62	◇	A-Ib①	13.0	2.85	8.0		橙	7.5YR 7/6	◇	◇	
63	◇	A-Ib②	12.8	3.47	8.45		透黄橙	10YR 8/4 7.5YR 7/6	◇	◇	
64	◇	杯	11.9	3.69	8.4		透黄橙	10YR 8/4 5YR 7/6	◇	◇	
65	◇	B-Ib	12.8	4.5	7.4		透黄橙	7.5YR 8/6 5YR 7/8	◇	◇	
66	黒色土器	椀 A	16.0	4.9	7.7	0.2	にぶい橙 黄灰	7.5YR 7/4 N 3/0	◇	◇	
67	◇	◇	17.4	5.4	9.2	0.5	黄灰	7.5YR 7/6 2.5Y 4/1	◇	◇	
68	土師器	土罐 全長 3.3 全幅 1.9 孔径 0.6				重量 13.1	灰白	10YR 8/2	◇	◇	
69	土師器	小皿 B-I	8.4	1.5	6.0		透黄橙	10YR 8/4 7.5YR 8/4	◇	H-10	
70	◇	B-IIa	8.0	1.3	4.6		灰白	10YR 8/2	◇	◇	
71	◇	◇	8.0	1.45	4.35	—	透黄橙 灰白	10YR 8/3 10YR 8/2	◇	◇	
72	◇	B-IIb	8.1	1.6	5.1	—	にぶい黄橙 灰白	10YR 7/2 10YR 8/1	◇	◇	

法 量 表 3

神田 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	内 (柄)	調査区	出士グリッド
			口径	器高	底径	高台高				
73	土師器	皿 A-Ia	12.2	2.2	7.0		透黄橙 橙	10YR 8/4 5YR 7/6	I区北	G-9
74	〃	〃 A-Ib	15.3	1.45	8.0		〃	7.5YR 7/6	〃	F-11
75	〃	〃 A-II	10.04	1.0	9.15		透黄 透黄橙	2.5Y 8/4 7.5YR 8/6	〃	〃
76	〃	〃	12.7	1.0	8.6		〃	5YR 7/8 7.5YR 7/6	〃	E-11
77	〃	〃 A-II	13.3	1.33	10.4		透黄橙	10YR 8/3 7.5YR 8/4	〃	G-9
78	〃	台付盥	22.6	1.75	17.4	0.8	〃	7.5YR 7/6	〃	G-12
79	〃	杯 A-I	8.9	3.1	6.3		〃	5YR 6/6 7.5YR 6/6	〃	F-10
80	〃	〃	10.6	3.0	7.5		透黄橙	7.5YR 8/6	〃	〃
81	〃	〃	11.5	3.6	7.2		〃	5YR 7/8	II区	F-8
82	〃	〃	12.6	3.25	8.7		〃	7.5YR 7/6 5YR 7/8	I区北	G-9
83	〃	〃	12.6	4.3	6.5		〃	5YR 7/6 5YR 7/8	〃	F-10
84	〃	A-Ib①	10.5	3.5	7.0		〃	5YR 6/6	〃	E-10
85	〃	〃	9.4	3.35	6.0		にぶい橙	7.5YR 7/4		TR-1
86	〃	〃	9.7	3.57	6.3		〃	〃		〃
87	〃	〃	9.9	3.4	6.1		〃	7/6	I区北	G-10
88	〃	〃	9.8	3.05	6.6		〃	7.5YR 7/6	〃	F-10
89	〃	A-Ib②	12.5	3.3	7.4		にぶい橙 橙	5YR 7/4 5YR 7/6	〃	〃
90	〃	〃	12.0	2.9	7.4		透黄橙	7.5YR 8/4	〃	〃
91	〃	A-Ib③	13.2	2.7	7.2		にぶい橙 透黄橙	7.5YR 7/4 7.5YR 8/3	〃	〃
92	〃	〃	12.7	3.03	7.1		〃	10YR 8/4 7.5YR 8/6	〃	G-9
93	〃	〃	11.6	2.8	6.2		にぶい黄橙	7.5YR 7/4 10YR 7/4	〃	F-10
94	〃	〃	12.0	2.95	6.4		透黄橙	10YR 8/4 7.5YR 8/6	〃	〃
95	〃	A-Ib④	12.2	2.95	7.2		にぶい黄橙 透黄橙	10YR 6/4 10YR 8/4	〃	〃
96	〃	〃	14.9	3.1	8.8		灰白	10YR 8/2 10YR 8/1	〃	〃
97	〃	A-Ib⑤	12.3	3.6	8.3		〃	7.5YR 7/6	〃	〃
98	〃	〃	12.5	3.7	7.4		透黄橙	7.5YR 8/4	〃	G-10
99	〃	〃	12.2	3.4	7.8		〃	10YR 8/3 7.5YR 8/4	〃	F-10
100	〃	〃	12.4	3.6	8.2		〃	10YR 8/6	〃	〃
101	〃	〃	13.4	3.45	6.3		〃	5YR 7/8	〃	〃
102	〃	A-Ib⑥	11.2	3.75	6.2		にぶい橙	7.5YR 7/6 7.5YR 7/4	〃	F-11
103	〃	〃	12.5	5.0	7.5		透黄橙	7.5YR 8/6	〃	F-10
104	〃	〃	12.6	4.0	8.0		にぶい橙	7.5YR 8/4 7.5YR 7/4	〃	〃
105	〃	〃	13.4	4.75	7.6		〃 透黄橙	7.5YR 7/6 7.5YR 8/4	〃	〃
106	〃	〃	11.1	4.6	7.6		明黄 透黄橙	10YR 7/6 5YR 7/8	〃	D-12
107	〃	A-Ib⑦	9.5	3.0	5.9		〃	7.5YR 7/6	〃	H-9

法 量 表 4

測図番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高				
108	土師器	杯 B-Ia	11.4	3.8	6.9		明赤褐 橙	5YR 6/6 2.5YR 6/8	I区北	F-10
109	+	+	11.3	4.05	6.8		黄橙	7.5YR 7/8	+	+
110	+	A-IIb	14.0	3.92	7.2		黄橙 灰	10YR 8/3 N 4/0	+	G-11 (SD3)
111	+	B	13.0	4.5	7.4	0.85	橙	5YR 7/6	+	I-12
112	+	+	-	(2.75)	9.0	0.7	にぶい黄橙 黄橙	10YR 7/4 7.5YR 7/8	+	F-12
113	+	+	-	(5.1)	9.6	2.7	黄橙	7.5YR 8/4 10YR 8/4	+	E-12
114	+	碗 A-II	15.0	6.35	6.8	0.5	にぶい黄橙 灰白	10YR 7/3 5Y 7/1	+	F-9
115	+	+	-	(3.55)	6.0	0.3	+	10YR 8/2	+	G-11 (SD4)
116	+	B-I	-	(3.3)	7.8	1.6	灰白	10YR 8/2 2.5Y 7/1	+	G-11
117	+	+	12.3	(4.5)	-		にぶい黄橙	10YR 7/4		TR-1
118	+	+	15.2	6.5	5.75	0.3	黄橙	10YR 8/3	I区北	F-10
119	+	C	-	(3.3)	9.4	0.8	橙	5YR 6/8	+	G-12 (P58)
120	+	+	-	(5.5)	9.3	0.95	+	2.5YR 6/8	+	E-12
121	+	+	16.8	5.45	8.0	0.7	黄橙 橙	7.5YR 8/6 5YR 7/8	+	I-12 (SX2)
122	黒色土器	A	14.5	5.3	7.5	0.5	暗灰	7.5YR 7/6 N 3/0	+	E-10
123	+	+	14.4	(3.2)	-		にぶい黄橙 暗灰	10YR 7/4 N 3/0		TR-1
124	+	+	-	(2.55)	8.8	0.8	橙 暗灰	7.5YR 6/6 N 3/0	I区北	E-10
125	+	B	15.0	5.65	5.2	0.3	灰	N 4/0		TR-1
126	+	+	13.6	(5.3)	-		暗灰	N 3/0		+
127	+	+	15.4	6.2	8.4		暗灰	N 3/0	I区北	G-10
128	緑釉陶器	碗	-	(2.3)	5.6	0.2			+	D-12
129	+	+	-	(2.25)	6.6	0.35			+	F-10
130	+	+	11.6	(2.8)	-				+	E-11
131	+	皿	10.25	(1.25)	-				+	G-13
132	+	+	-	(1.5)	6.0	0.3			+	J-12
133	+	碗	-	(2.05)	7.6	0.4				TR-1
134	+	皿	13.4	2.4	7.0	0.33			+	D-12
135	+	碗	-	(1.9)	8.8	0.65				TR-17
136	灰釉陶器	壺	15.4	4.98	7.8	0.95	黄 オリーブ灰	2.5Y 7/3 10Y 6/2	I区北	G-10
137	土師器	壺 A-I	26.6	(7.0)	-	胴径 21.35	明赤褐 灰褐	5/6 7.5YR 4/2	+	G-11
138	+	+	31.2	(5.3)	-		橙 にぶい橙	5YR 6/6 7.5YR 7/4	+	G-9
139	+	A-II	20.6	(6.7)	-	胴径 18.6	にぶい黄橙	7.5YR 7/4	+	I-10
140	+	+	28.2	(6.9)	-		橙	10YR 7/4 7.5YR 7/6	+	G-10
141	+	+	20.9	(6.7)	-	胴径 18.05	明赤褐	2.5YR 5/8 2.5YR 5/6	+	F-11
142	+	+	29.5	(5.2)	-	-	橙	2.5YR 6/6	+	H-10

法 量 表 5

測定番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	内 (断)	調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高				
143	土師器	壺 A-II	29.0	(4.1)	-	-	にぶい赤褐色 にぶい橙	2.5YR 5/4 5YR 6/4	II区	F-6
144	〃	〃 A-III	23.4	(4.8)	-	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	10YR 6/3 10YR 6/2	I区北	G-9
145	〃	〃	19.5	(4.7)	-	-	にぶい橙	5YR 7/6 7.5YR 7/4	II区	F-8
146	〃	〃	21.2	(3.8)	-	-	灰	N 4/0	I区北	F-12
147	〃	〃 B	16.6	(6.2)	-	-	橙	5YR 7/8	〃	I-12
148	〃	〃	18.6	(2.5)	-	-	灰褐色 にぶい赤褐色	5YR 4/2 5YR 5/4	〃	E-11
149	〃	羽釜 A-1	26.2	6.7	-	-	灰褐色 にぶい黄褐色	7.5YR 6/2 10YR 7/3	〃	D-12
150	〃	〃	22.3	(17.4)	-	胴径 21.5	淡黄褐色	10YR 8/3	〃	TR-1
151	〃	〃	27.5	(4.2)	-	-	灰褐色 橙	5YR 4/2 5YR 6/6	I区北	G-11
152	〃	〃	25.2	(13.45)	-	胴径 27.25	灰黄褐色 にぶい黄褐色	10YR 6/2 10YR 7/4	〃	G-9
153	〃	〃 A-2	18.8	(6.8)	-	胴径 18.7	にぶい褐色	7.5YR 5/4	〃	F-9
154	〃	〃 A-2	23.6	(7.9)	-	-	橙 灰黄褐色	5YR 6/6 10YR 5/2	I区北	E-11
155	〃	〃	18.8	(7.7)	-	-	橙 灰黄褐色	5YR 6/6 10YR 5/2	II区	
156	〃	〃 B	21.6	(7.2)	-	胴径 22.4	にぶい黄褐色	10YR 7/4 10YR 7/3	I区北	F-13
157	〃	〃	22.2	(6.2)	-	胴径 23.1	淡黄褐色 にぶい黄褐色	10YR 8/4 10YR 7/3	〃	E-12
158	〃	壺	27.0	(6.5)	-	-	にぶい橙	7.5YR 7/4	〃	F-12
159		土師	全長 4.7	全幅 2.3	孔径 0.5	重量 19.2(g)	にぶい橙	7.5YR 7/4	〃	G-12
160	〃	〃	全長 3.7	全幅 1.9	孔径 0.6	重量 11.2(g)	暗灰	N 3/0	I区南	D-10
161	〃	〃	全長 (4.5)	全幅 1.1	孔径 0.42	重量 3.5(g)	橙	7.5YR 7/6	I区北	E-10
162	〃	〃	全長 7.45	全幅 4.1	孔径 3.65	重量 88.2(g)	橙	5YR 7/6	〃	G-10
163	須恵器	杯 A	14.0	3.4	9.4	-	灰	N 6/0	〃	G-13
164	〃	〃 B	-	(2.8)	6.0	0.3	灰白	N 8/0 7.5Y 7/1	〃	F-13
165	〃	〃 C	-	(2.2)	7.7	5.0	灰白	2.5Y 7/1	〃	H-11
166	〃	〃	12.0	3.8	7.4	0.4	補灰	10YR 6/1	II区	F-7
167	〃	壺	-	1.6	-	つまみ径 2.3	灰	N 6/0	I区北	G-12
168	〃	〃	-	(1.8)	-	つまみ径 2.7	淡黄	2.5Y 8/3	〃	G-13
169	〃	〃	12.0	(2.2)	-	縁径 12.7	暗紫灰 暗灰	5P 4/1 7.5YR 6/1	〃	〃
170	〃	壺	-	(12.6)	13.0	0.8	青灰 灰白	5PB 6/1 7.5Y 7/1	〃	E-10
171	〃	〃	-	(2.7)	9.4	0.6	灰白	N 7/0 2.5Y 7/1	〃	G-10
172	〃	〃	-	(4.7)	9.9	0.4	灰白	5Y 7/1 N 7/0	〃	H-11
173	〃	壺 A	21.2	(7.2)	-	-	灰白 にぶい橙	2.5Y 7/1 7.5YR 7/3	〃	TR-28
174	〃	〃	17.8	(13.6)	-	胴径 31.0	灰	5Y 6/1 N 6/0	I区北	G-9
175	〃	〃	-	-	-	-	灰	N 6/0 N 7/0	〃	E-11
176	〃	〃 B-2	26.2	(4.5)	-	-	灰	N 5/0 N 6/0	II区	F-7
177	〃	鉢 A	22.75	(3.9)	-	-	淡黄褐色	10YR 8/3	I区北	F-12

法 量 表 6

神岡 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)	調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高				
178	土師器	小皿 B-IIb	8.0	1.75	4.0		淡黄橙 7.5YR 8/4	I 区南	F-20	
179	〃	B-IIb	7.6	1.4	5.0		橙 5YR 7/6	〃	I-22 (P115)	
180	〃	B-IIa	8.6	1.4	5.0		淡黄橙 7.5YR 8/4	〃	J-21	
181	〃	B-IIb	8.6	1.73	5.4		灰白 10YR 8/2	〃	I-20	
182	〃	〃	8.0	1.28	5.2		淡黄橙 7.5YR 8/6	〃	G-20	
183	〃	B-IIa	8.0	1.7	5.7		灰白 10YR 8/2	〃	J-21 (P85)	
184	〃	B-I	8.0	1.5	5.6		橙 5YR 7/6	〃	G-21 (P123)	
185	〃	杯 A-IIa	16.0	4.8	7.65		淡黄橙 7.5YR 8/4 灰白 10YR 8/2	〃	K-19	
186	〃	A-IIa	15.0	4.6	5.85		橙 5YR 7/6	〃	I-23 (SD8)	
187	〃	〃	15.8	4.4	8.0		黄橙 10YR 8/6	〃	J-18 (SD11P164)	
188	〃	〃	16.2	4.4	7.8		淡黄橙 10YR 8/3	〃	I-20	
189	〃	A-IIb	15.75	4.6	7.0		灰白 10YR 8/2	〃	J-21	
190	〃	〃	-	(2.4)	7.0	1.2	淡黄橙 7.5YR 8/4	〃	I-22 (P115)	
191	〃	〃	-	(3.95)	6.2	1.7	淡黄橙 7.5YR 8/3 灰白 10YR 8/1	〃	G-20	
192	〃	椀	-	(3.65)	5.75	0.2	淡黄橙 7.5YR 8/6	〃	G-20 (SD-14)	
193	〃	〃	-	(2.75)	5.6	0.4	灰白 10YR 8/1 10YR 8/2	〃	H-19 (SD-16)	
194	〃	B-II	-	(2.4)	5.4	0.3	淡黄橙 7.5YR 8/6 10YR 8/4	〃	G-20 (SD-14)	
195	〃	〃	-	(3.05)	5.7	0.45	〃 7.5YR 8/3	〃	H-19 (SD-16)	
196	〃	〃	-	(3.5)	5.6	0.35	〃 7.5YR 8/6	〃	I-19 (SD-11)	
197	瓦器	椀	14.0	(3.15)	-		灰 N 4/0	〃	G-20	
198	〃	〃	14.7	(3.9)	-		黄灰 2.5Y 6/1 灰 N 4/0	〃	I-20	
199	〃	皿	9.5	(2.3)	-		黄灰 N 3/0	〃	J-21	
200	〃	椀	-	(0.93)	4.2	0.35	淡黄橙 10YR 8/4 10YR 8/3	〃	I-22 (P115)	
201	〃	〃	-	(1.0)	6.0	0.3	灰 N 6/0 N 4/0	〃	I-18 (P137)	
202	埴輪陶器	皿	-	(1.3)	6.7	0.9	灰白 2.5Y 8/1	〃	H-20	
203	土師器	土鉢	全径 4.3	全幅 1.7	孔径 0.5	重量 12.55	灰白 N 7/0	〃	G-22	
204	土師器	壺 A-I	30.4	(9.9)	-		橙 7.5YR 7/6	〃	G-20 (SD14)	
205	〃	〃	28.0	(4.6)	-		灰褐 7.5YR 6/2 にぶい橙 7.5YR 7/3	〃	I-22	
206	須恵器	杯 B	10.2	3.45	4.8	0.7	灰白 5Y 8/1 5Y 7/1	〃	G-23	
207	〃	壺 B-I	20.2	6.8	-		灰白 N 7/0 にぶい赤褐 5YR 5/4	〃	I-20	
208	〃	B-II	25.8	(22.5)	-		灰白 5Y 7/1 灰 N 6/0	〃	J-21	
209	〃	鉢	25.1	(5.25)	-		淡黄橙 10YR 8/4	〃	〃	
210	〃	A	21.1	(3.9)	-		黄灰 2.5YR 6/1 灰白 10YR 7/2	〃	I-22 (P117)	
211	〃	〃	21.5	(8.5)	-		黄灰 2.5Y 6/1	〃	K-19	
212	〃	B	24.5	10.5	12.0		灰白 10YR 8/1	〃	G-20	

法 量 表 7

神田 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内 (断)		調査区	出土グリッド
			口径	器高	底径	高台高		内	外		
213	青磁	碗	17.4	(3.0)	-		灰オリーブ 灰白	7.5Y 6/2 7.5Y 7/1		I区南	H-22
214	〃	〃	-	(3.4)	4.9	0.7	灰オリーブ 灰白	7.5Y 6/2 7.5Y 7/1	〃		G-21
215	青白磁	合子蓋	5.0	1.7			明緑灰 灰白	10GY 7/1 7.5Y 8/1	〃		G-20 (SD-14)
216	白磁	碗	16.4	(2.3)	-		灰白	7.5Y 8/1 7.5Y 8/2 2.5Y 8/1	〃		F-21
217	〃	〃	17.0	(3.1)	-		灰白	2.5Y 7/2 2.5Y 8/1	〃		I-20
218	〃	〃	15.0	(2.5)	-		灰白	7.5Y 7/1 5Y 8/1	〃		G-21 (P123)
219	〃	〃	16.0	(3.3)	-		灰白	7.5Y 7/1 5Y 8/1	〃		F-25
220	〃	〃	15.0	(1.9)			灰白	10Y 7/1 5Y 8/1	〃		J-21 (P86)
221	〃	〃	16.0	(5.6)	-		灰白	10Y 7/1 5Y 8/1	〃		J-21
222	〃	〃	15.1	(3.2)	-		明オリーブ灰 灰白	2.5GY 7/1 5Y 8/1	〃		F-24
223	〃	〃	14.8	(2.4)	-		灰白	10Y 8/1 5Y 8/1	〃		G-20
224	〃	〃	-	(2.8)	5.4	0.6	灰白	5Y 7/2 5Y 8/1	〃		J-21
225	〃	〃	-	(2.5)	8.1	4.5	灰白	10YR 8/1 N 8/1	〃		J-20
226	〃	〃	-	(1.7)	7.2	0.2	灰白	5Y 8/1 N 8/0	〃		I-20
227	〃	〃	-	(2.25)	6.0	0.8	灰白	2.5Y 8/1 N 8/0	〃		J-21
228	〃	〃	-	(2.0)	6.4	0.8	灰白	10Y 8/1	〃		H-20
229	〃	〃	-	(1.7)	5.5	0.6	灰白	10Y 8/1 2.5Y 8/1	〃		G-21
230	〃	〃	14.8	(3.7)	-		灰白	7.5Y 7/1 7.5Y 8/1	〃		H-22
231	〃	〃	15.9	(4.7)	-		灰白	5Y 7/2 5Y 8/1	〃		J-21
232	〃	〃	16.6	(4.3)	-		灰白	7.5Y 7/1 8/1		I区	H-17

瓦 法 量 表

21	瓦	平瓦	全長 (11.0)	全幅 (9.8)	全厚 (1.5)		灰白	N 7/0	I区南	I-20 (SD12)
233	〃	〃	全長 (19.7)	全幅 (15.9)	全厚 (1.9)		灰 灰白	N 4/0 N 7/0	〃	H-23
234	〃	〃	全長 (9.9)	全幅 (7.25)	全厚 (2.2)		灰白	N 8/0	〃	I-23
235	〃	〃	全長 (5.5)	全幅 (8.6)	全厚 (1.3)		灰白	N 7/0	〃	I-22
236	〃	〃	全長 (9.8)	全幅 (7.9)	全厚 (1.5)		灰白	N 6/0	〃	〃
237	〃	軒平瓦			全厚 (3.1)		灰白	10YR 8/1	〃	I-23 (SD)

写 真 图 版



調査前全景 (南東から)



I区調査前全景 (西から)



I区北調査風景 (東から)



I区南調査風景 (北西から)



I区北遺構検出状況 (北から)



I区北遺構完掘状況 (北から)



II区調査風景 (北から)



II区遺物出土状況 (南から)

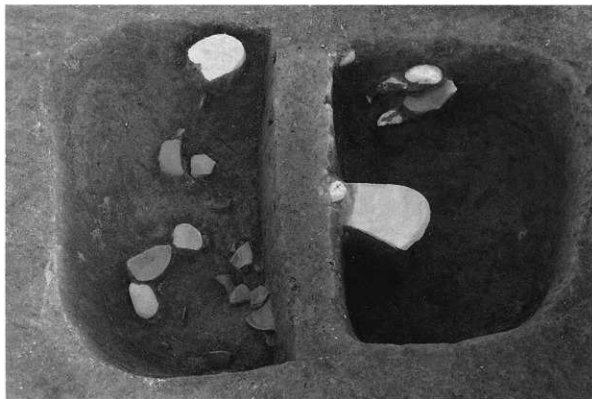


I区北遺物出土状況



同上

PL. 6



SK1 遺物出土状況



G-9 グリッド遺物出土状況



G-9 グリッド遺物出土状況



同上拡大



P88遺物出土状況



同上拡大



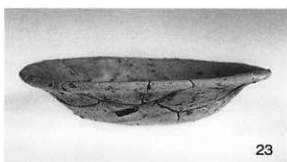
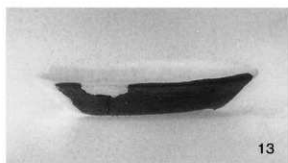
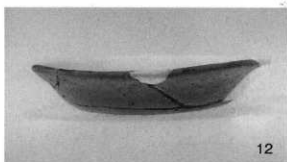
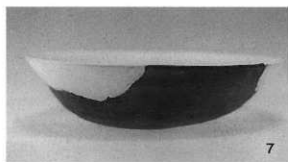
SD12・13 遺物出土状況 (西から)



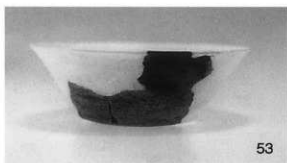
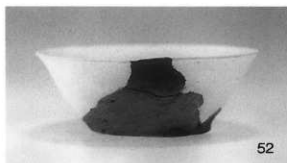
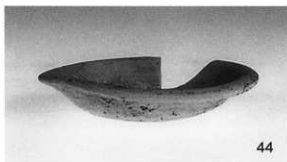
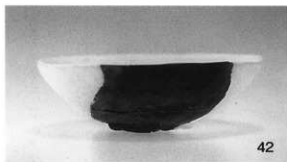
同上 (東から)

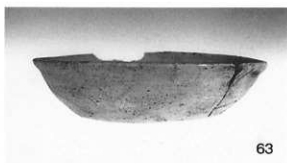
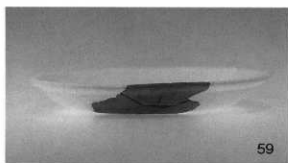
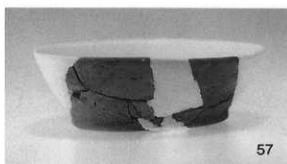


SD12・13, P88, SB1 完掘状況 (東から)

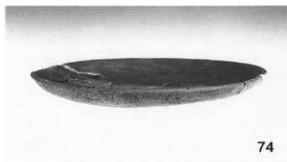
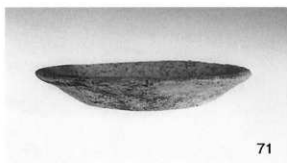
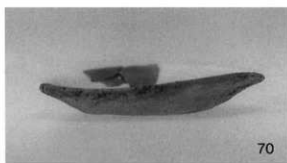
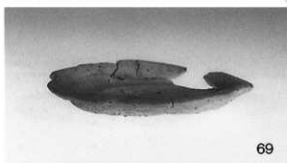


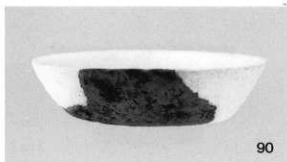
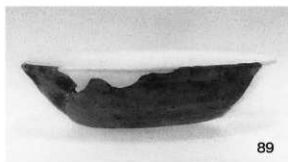
土師器皿・杯



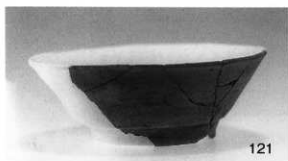


土師器皿・杯・椀

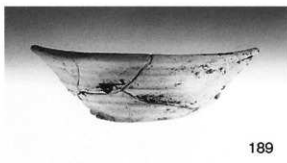




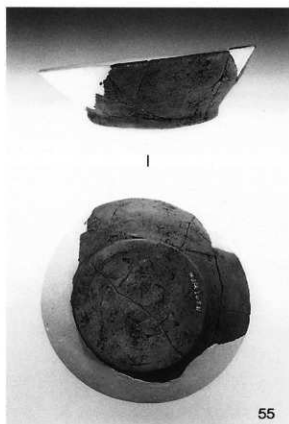
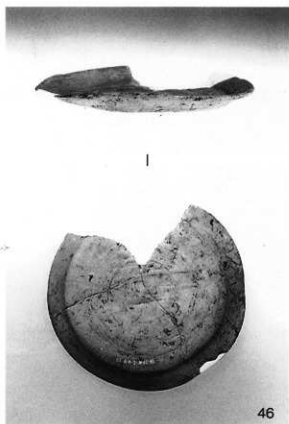
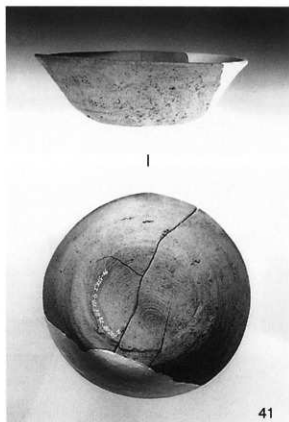
土師器杯



土師器杯・椀，黑色土器椀，灰釉陶器椀，須惠器杯・壺



土師器杯, 瓦器皿, 土師器甕, 須惠器杯, 甕



土師器皿・杯



|



56



|



75



|



88



|



97

土師器皿・杯



|



98



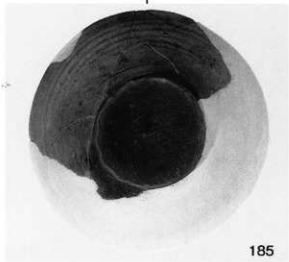
|



127



|



185

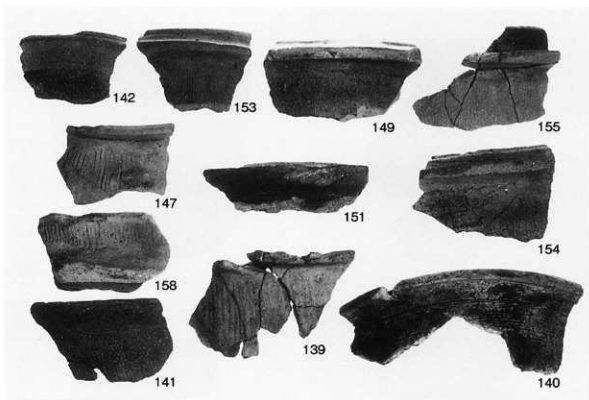


117

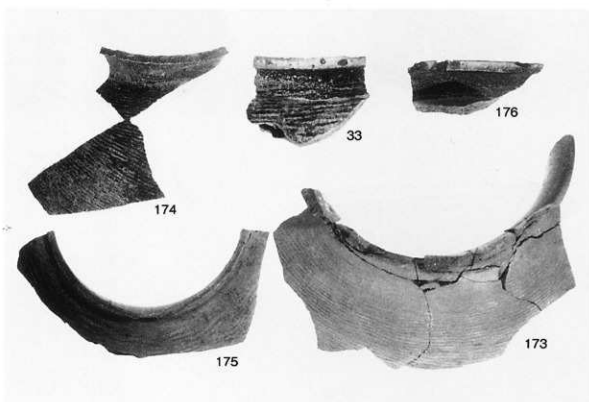
土師器杯・碗，黑色土器碗



土師器甕, 羽釜, 須惠器甕



土師器壺・釜



須志器壺

報告書抄録

ふりがな	ふかぶちきたいせき							
書名	深湖北遺跡							
副書名	野市町西部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	野市町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編集者名	佐竹 寛・吉成承三							
編集機関	野市町教育委員会							
所在地	〒781-5292 高知県香美郡野市町西野2706							
発行年月日	1996年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
深湖北遺跡	高知県 香美郡 野市町 父養寺	39324	200019	33° 34° 52°	133° 41° 34°	一次調査 平成6年5月17日 ～ 平成6年5月24日 二次調査 平成6年9月13日 ～ 平成6年12月6日	500㎡ 2710㎡	野市町西部 地区県営圃 場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
深湖北遺跡	集落	平安～ 鎌倉	掘立柱建物跡 柱穴 土坑 溝	土師器 須恵器 土師質土器 黒色土器 瓦器 緑釉陶器 灰釉陶器 青磁 白磁 鉄器 石器 瓦			桶型黒色土器など 搬入品が出土。また、 同安窯系青磁など貿易 陶磁器も多数出土 する。	

深 淵 北 遺 跡

(野市町埋藏文化財発掘調査報告書第4集)

1996年3月

編集
発行

高知県香美郡野市町教育委員会

高知県香美郡野市町西野 2706

電話 (0887) 56-3910

印刷

祐西村謄写堂